

市原市^こ小^{やっ}谷 1 号墳

1 9 9 2

序 文

かつて上総と下総とを分かち川であった村田川流域には、数多くの遺跡があります。右岸の草刈貝塚、左岸の菊間手永貝塚などの縄文時代の遺跡、菊間遺跡や大厩遺跡などの弥生時代の遺跡、さらには、かつての菊麻国造の本拠地と目される菊間古墳群など、県内でも有数の遺跡が、この川の流域には展開しています。

今回報告する小谷1号墳は、村田川中流域左岸の潤井戸地区に所在した前方後円墳です。急傾斜地の直上に位置し、その砂防工事に先行して調査を実施したものです。調査のおこなわれた昭和63年は、度重なる豪雨があり、その前年には千葉県東方沖地震が県内各地で甚大な被害を引き起こしました。本地区においても地盤が弛み、数回にわたる土砂の流出があったと聞いております。そのような差し迫った状況に鑑み、砂防工事が実施されるようになったわけですが、まさにその上に本古墳は存在していました。人命が大事か、文化財が大事かという、まさに究極の選択に迫られていたと言っても過言ではありません。そのような状況のもとに、調査は実施されました。その結果、市内でも類例の少ない埴輪列の検出にいたりました。また、本市は言うに及ばず、千葉県さらには関東地方に目を広げても類例をみない、特徴的な技法を留める大甕が出土したことも注目されます。

本報告書が学術資料としてのみならず、広く市民の方々の文化財保護思想の涵養に供されるよう期待してやみません。

最後に、調査から報告書刊行にいたるまで御協力、御指導いただいた千葉縣市原土木事務所、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会文化課ならびに関係諸機関、緊迫した状況の中、最後まで御協力を惜しまれなかった地元の皆さんに心から感謝の意を表する次第です。

平成4年3月

財団法人	市原市文化財センター
理事長	星 野 一 郎

例 言

1. 本書は、千葉縣市原市潤井戸における砂防整備工事に伴い、事業に先行して実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本書に所収する内容は、千葉縣市原市潤井戸字小谷678番地他に所在する小谷1号墳についての報告である。
3. 発掘調査は、千葉縣市原土木事務所の委託を受け、千葉県教育委員会・市原市教育委員会の指導のもと財団法人市原市文化財センターが実施した。
4. 調査対象は、古墳1基である。
5. 発掘調査・整理作業は下記の通り行った。
発掘調査 昭和63年8月1日～9月15日 担当 高橋康男
整理作業 平成3年1月4日～3月31日 担当 浅利幸一(水洗・注記からレイアウトまで)
平成3年11月1日～12月27日 担当 高橋康男(レイアウト・原稿執筆から印刷・刊行まで)
6. 調査による出土遺物および記録類は、市原市埋蔵文化財調査センターで保管している。
7. 市原市文化財センター調査コードは、(セ82)である。

凡 例

1. 縮尺は遺構に関して、古墳全体図は1/300、その他は適宜である。遺物は埴輪については1/5、その他については1/3を原則とした。
2. 方位は、古墳全体図に関しては座標北、それ以外は磁北である。
3. 本書で使用した地形図は、市原市地形図1/2500C-7である。
4. 埴輪に関しての計測部位および略称は次頁の通りである。

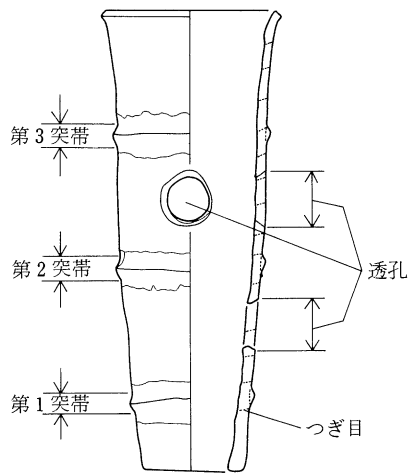
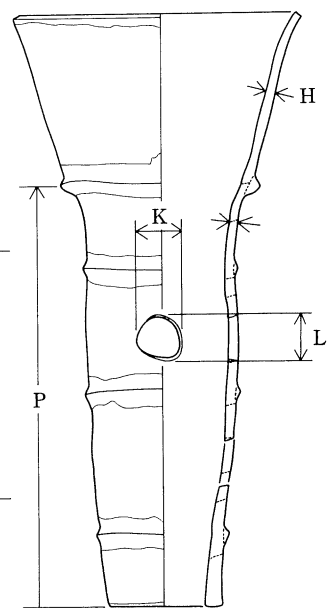
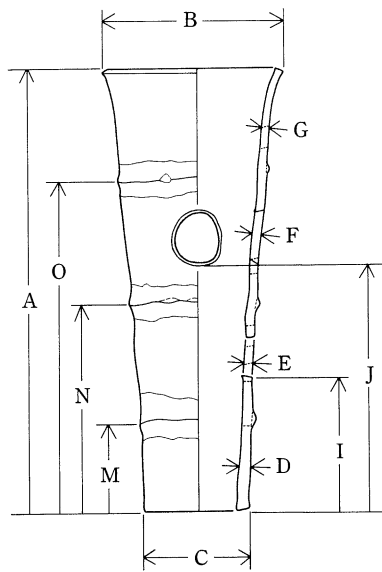
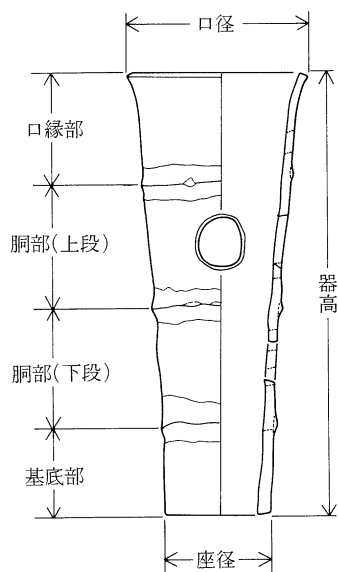
埴輪観察表凡例

本遺跡出土の埴輪観察表にあたっては、「塚廻り古墳群」(1980年・群馬県教育委員会)を参考に一部改編し用いた。

1. 埴輪観察表は、外寸の計測(器高・口径・底径)、透孔の位置と計測、突帯の位置、刷毛目の単位、色調・胎土・焼成、成形・調整などに分け記載した。
2. 番号は、出土位置・挿図・図版とも通し番号で統一した。
3. 形態は、普通円筒埴輪(普)・朝顔形円筒埴輪(朝)と記載する。また、本稿で言う円筒埴輪は普通・朝顔の両埴輪を指す。
4. 器高・口径は、任意に計点箇所を選び計測するため、実測図とは必ずしも一致しないが、概ね平均値を示す。底径は、最小～最大径を計測した。また、()書きは推定値を、計測できないものは、――線で表示した。
5. 器高は、普通円筒埴輪が総て3条4段構成と認められるため、上から口縁部・胴部2段・基底部の計4箇所、朝顔形円筒埴輪は胴部3段の5箇所の各部の遺存良好な部分を任意に選び計測した。表示は、下段から基底部・胴部1段・胴部2段・口縁部の順である。
6. 透孔は、底面から透孔下端までの寸法と透孔の幅・高さ、また基底部を欠く物については口縁部から透孔下端をそれぞれ計測表示した。胴部下段・上段に2個一対で穿つ為4孔の計測値を表示する。
7. 突帯は、下方より第1・第2・第3とし、底面より高さを計測した。
8. 刷毛目は、平均箇所2cm幅で2箇所での刷毛目の本数を測定し、数値が異なる物については、備考欄に刷毛目不規則と表示した。
9. 色調・胎土・焼成は、それぞれ凡例を設けアルファベットで表示した。
10. 整形・調整については、基部製作時での右・左巻きの表示、内・外面の調整痕を記した。
11. 備考欄には、基部・底部・輪積みの痕跡等の特徴を記した。
12. 実測図作成にあたり遺存良好な物に関しては、シン航空写真株式会社の「スリット式正射投影写真撮影装置による遺物の単写真計測」を基に、一部修正・加筆し作成した。

番 号	形 態	器 高	口 徑	底 徑	器 厚	透 孔				突 帶 高				
						下 段		上 段						
11	普	A 45.2	B 18.5	C 11.5 ∪ 12	H	I	14	J	26.5	27.6	P O N M			
					G 1.1			K				L	K	L
					F 1.2	13.7	4.9		4.6	4.2				
					E 1.3	5.6	5.6		5.3	5.8				
					D 1.5									

H・Pは朝顔形円筒埴輪のみ計測

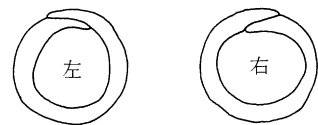


- 色調
- A 橙色
 - B にぶい橙色
 - C 浅黄橙色
 - D 明赤褐色
 - E 赤褐色

- 胎土
- A 細砂多量含む
 - B 砂質少量含む

- 焼成
- A 良好
 - B 普通
 - C 不良

基部



基部板目圧痕



底部板目圧痕

刷毛目数	色調	胎土	焼成	成形・調整	備考

- a 硬い
- b 普通
- c 軟い

本文目次

序文

例言

凡例

第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査の方法と経過	1
第3章 遺構	3
1 調査前の所見	3
2 トレンチの設定および成果	3
3 前方部埴輪列	6
4 後円部の調査	6
5 埴頂部	10
6 住居跡	11

第4章 遺物	11
1 埴輪	11
2 須恵器大甕	30
3 その他の須恵器	31
4 土師器	32
5 太刀	32
6 縄文土器	33
第5章 まとめ	34
1 遺構	34
2 遺物	35
3 総括	36
主要参考文献	37

挿図目次

第1図 小谷1号墳と周辺の遺跡	2
第2図 小谷1号墳周辺地形図	2
第3図 小谷1号墳現況測量図	3
第4図 小谷1号墳トレンチ配置図	4
第5図 1・2・4トレ断面実測図	5
第6図 前方部埴輪列検出状況	7～8
第7図 後円部全体図	9
第8図 後円部埴輪列検出状況	10
第9図 埴頂部須恵器大甕出土状況	10
第10図 住居跡実測図	11

第11図～第20図 円筒埴輪実測図(1)～(10)	12～21
第21・22図 埴輪内面刷毛目拓影(1)(2)	22・23
第23図 須恵器大甕実測図	30
第24図 須恵器大甕内面拓影	31
第25図 須恵器実測図	32
第26図 土師器実測図	32
第27図 太刀実測図	33
第28図 縄文土器実測図	33
第29図 小谷1号墳全体図	34

表目次

第1表 市原市内出土埴輪一覧表	23
-----------------	----

第2表 円筒埴輪観察表(1)～(6)...	24～29
-----------------------	-------

写真図版目次

図版1	1 小谷1号墳遠景
	2 調査前の後円部
図版2	1 前方部埴輪列全景
	2 くびれ部付近の埴輪列
図版3	1 後円部埴輪列検出状況
	2 周溝内遺物出土状況

図版4	1 埴頂部須恵器大甕検出状況
	2 住居跡全景
図版5～9	円筒埴輪(1)～(5)
図版10	須恵器・土師器・太刀
図版11	縄文土器

第1章 遺跡の位置と環境

小谷1号墳は、村田川左岸の標高約40mの台地のほぼ先端に位置する。周辺に展開する小谷古墳群は全体では約10基の比較的小規模な古墳により、形成されている。同古墳群と小支谷を隔てた西側には、山王後古墳群が対峙している。小谷古墳群に関しては、これまで調査の手が及んだことはなく今回の調査が最初の例となる。一方の山王後古墳群については、昭和52年に、送電線鉄塔の建設に先行して、1基の前方後円墳が調査されており、その際には主体部から、鉄刀が検出されている。主体部は木棺直葬である。

視野を、村田川流域に広げると、様々な成果が上がっている。左岸の潤井戸地区に限定しても、沖積地上の西山遺跡では、弥生時代の環壕集落の一部が検出され、またこの西山遺跡およびこの遺跡と一連の遺跡である、草刈尾梨遺跡では、古墳時代の居館址が検出されている。これら遺跡の南では居鞍遺跡および天王台遺跡の調査が行われている。さらに南方では、下鈴野遺跡の調査が行われ、古墳時代前期を中心とする集落が完掘されている。これら成果に関しては文末に掲げる文献を参考にしていただければ幸いである。いまだに調査が実施されていないものではあるが、潤井戸地区には杉山古墳と高野前古墳という比較的大規模の古墳が2基存在している。このうち高野前古墳は河岸段丘に位置しており、立地場所としては例外的な存在といえる。全長は推定で約90mといわれており、潤井戸地区では最大級である。

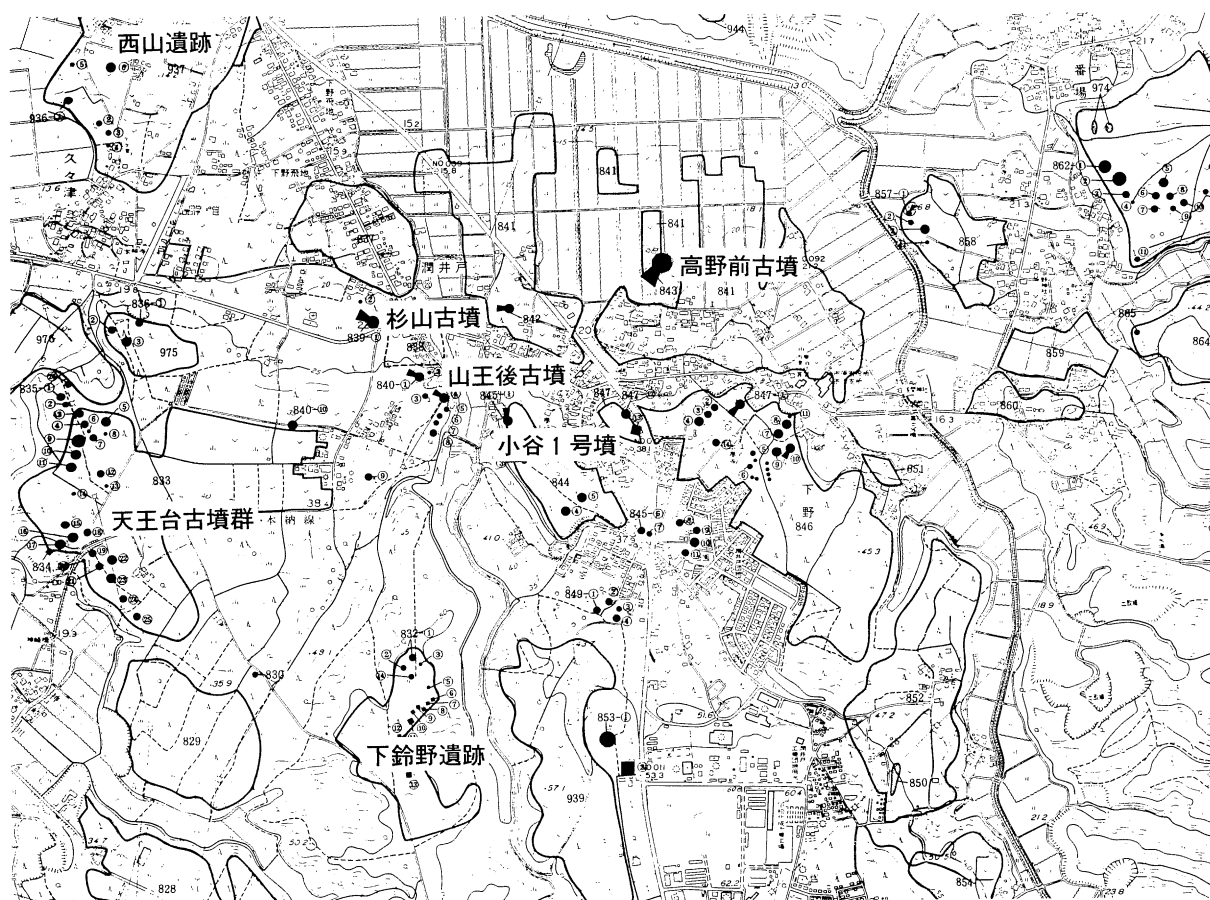
村田川右岸においては、千原台地区において現在も千葉県文化財センターによる調査が継続中であり、今後も調査が継続される状況であり、現段階においては、総体的な言及は避けておきたい。なお個別の状況に関しては、文末の文献を参照していただきたい。

なお、本報告との関連に関していえば、村田川流域における埴輪の検出例は、菊間遺跡の第5号周溝で報告されているにすぎない。

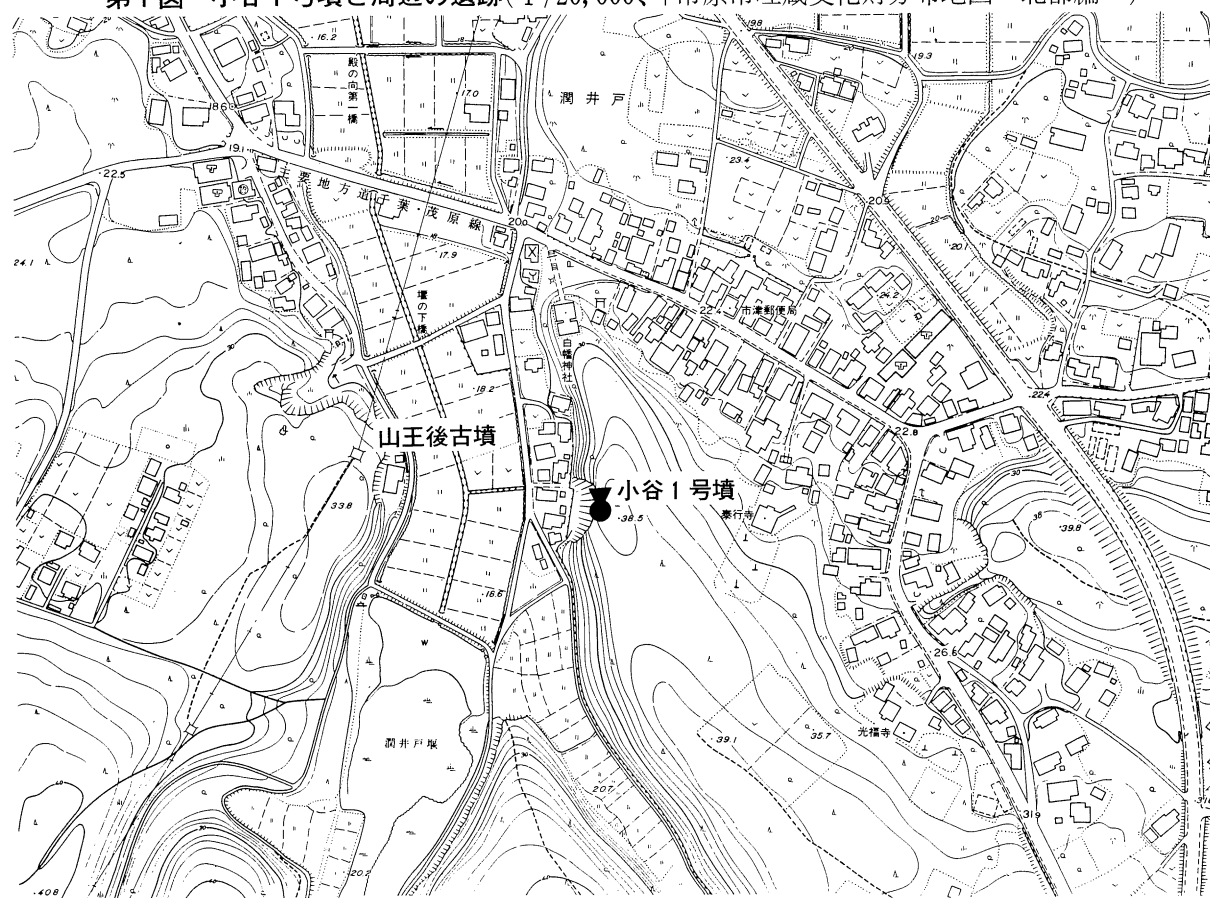
第2章 調査の方法と経過

小谷1号墳は、急傾斜地直上に位置し、西半はすでに失われていた。西側直下には民家が立ち並んでおり、調査の直前までは、千葉県東方沖地震および降り続いた豪雨の影響で地盤が緩み、小規模な崩落を繰り返していたという状況であった。したがって、調査も早急に終了させる必要があり、通常の調査とは異なる方法で対処する方針で臨んだ。すなわち、現況における測量図の作成、トレンチ調査による周溝の確認および古墳の規模の確定、主体部が確認された場合にはその調査、下層の調査は行わない。当初は以上の予定で着手した。

後円部のトレンチの調査において、周溝部分から大量の円筒埴輪片が検出され、また、前方部トレンチの北端部分において、埴輪列の一部が検出されたことにより、当初の計画を変更し、埴輪列の検出に主眼をおくところとなった。また、主体部については、後円部墳頂部のトレンチの調査により、須恵器の大甕が出土し、付近に主体部が存在する可能性が考えられたが、推定される部分の直上に御神木があり、この御神木については移植される予定であって、それは、重機が進入できなければ不可能であって、したがって、調査を一旦終了して、砂防工事に着手してからでなければ無理な状況であった。そのため主体部については通常の調査は断念し、移植工事の際に立ち会うという結論に達した。



第1図 小谷1号墳と周辺の遺跡(1/20,000、「市原市埋蔵文化財分布地図―北部編―」)



第2図 小谷1号墳周辺地形図(1/5000)

第3章 遺 構

1、調査前の所見

第3図は、小谷1号墳の着手前の航空写真測量図である。既に述べたように、西半は大きくくずれており、本来の墳丘の半分以上が失われていると考えられた。前方部と後円部の高低差もわずかと言って良く、前期古墳の可能性が考えられていたところである。周溝については後円部側で若干低くなっているのが見てとれるが、前方部側および東側においては、それとおぼしき状況は見出せなかった。

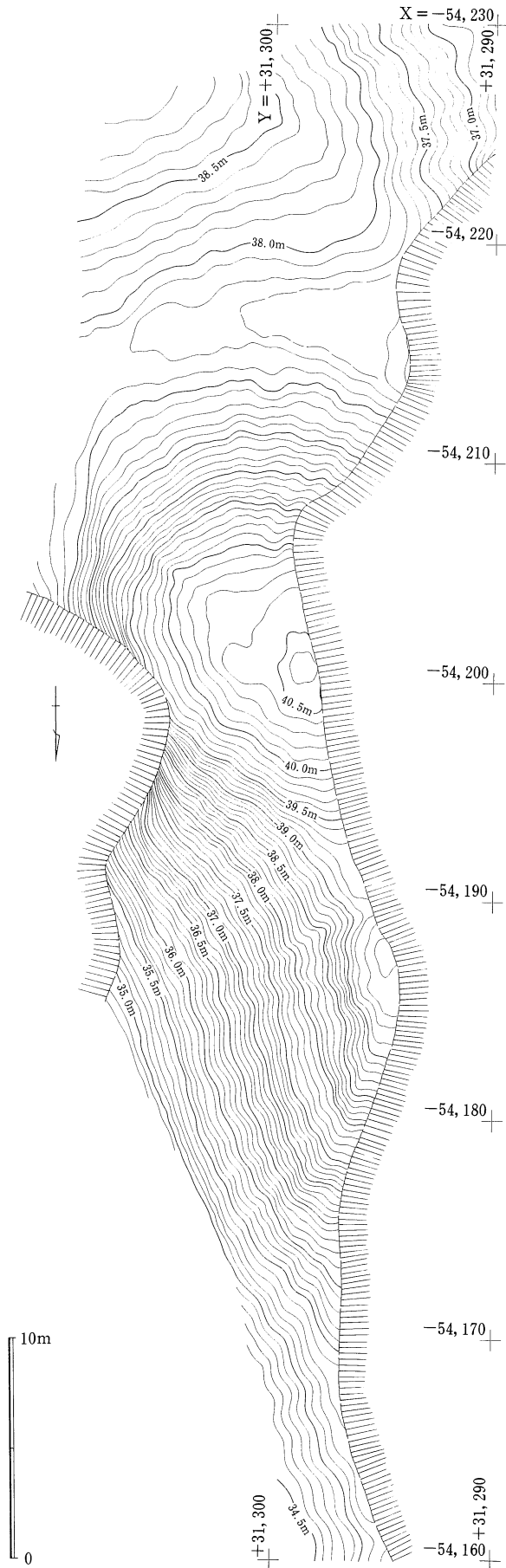
なお、調査中に地元の方から聞いた話であるがかつて、西側の崩落土中から完形に近い埴輪が採取され、しばらく市内の小学校に保管されていたとのことであるが、その後の消息については不明とのことであった。

2、トレンチの設定およびその成果

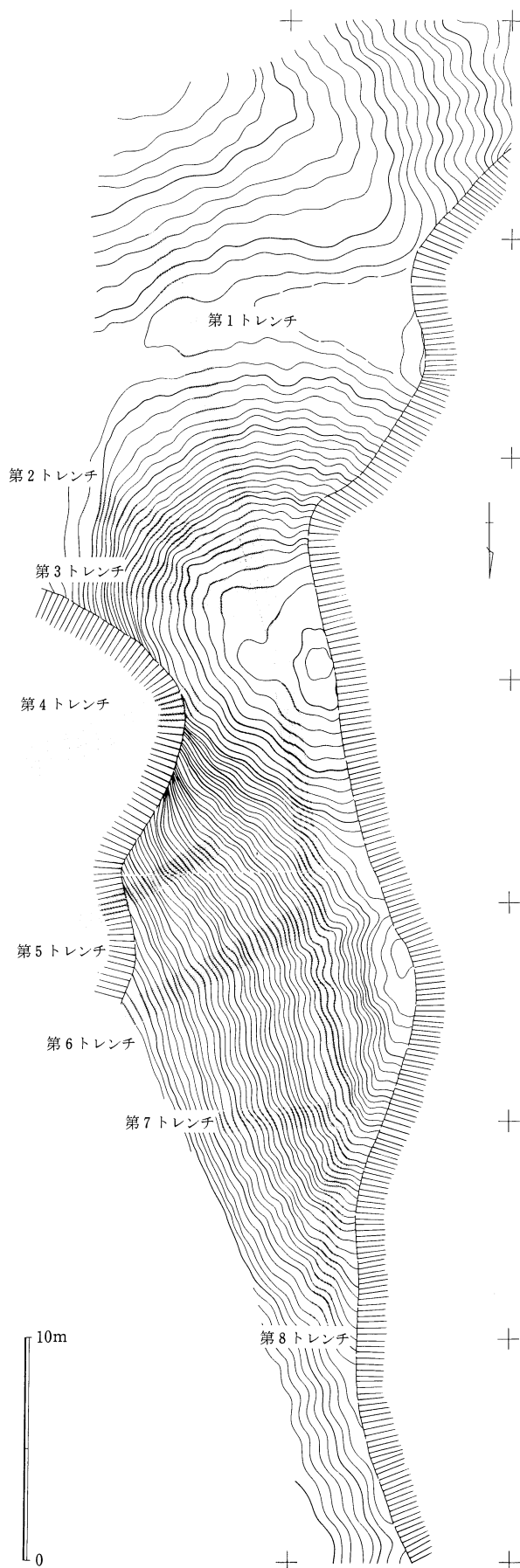
前章で触れたとおり、当初は本古墳の規模および時期について何らかの成果が得られればそれで良しとする方針であったので、周溝の確定、主体部の確認、墳形の復元を目的として第4図に示したような位置にトレンチを設定した。

第1トレンチの後円部の周溝部分の掘り下げの進行に伴い、大量の埴輪の破片が出土が確認され着手前の前期古墳という予想は覆ることとなった。また、前方部側においては、埴輪列の一部が比較的良好な残存状況で検出されるという結果となった。また、前方部東側面に設定したトレンチの南側で溝状の落ち込みが確認された。この落ち込みの部分についても拡張した結果、住居跡が検出された。なお、これらについては後述する。

周溝に関しては、後円部南側については検出されたもの、東側および前方部北側においては検出されなかった。トレンチ設定範囲からはみだした位置に存在することも考え難く、当初より存在しなかったものと判断される。



第3図 小谷1号墳現況測量図(1/300)



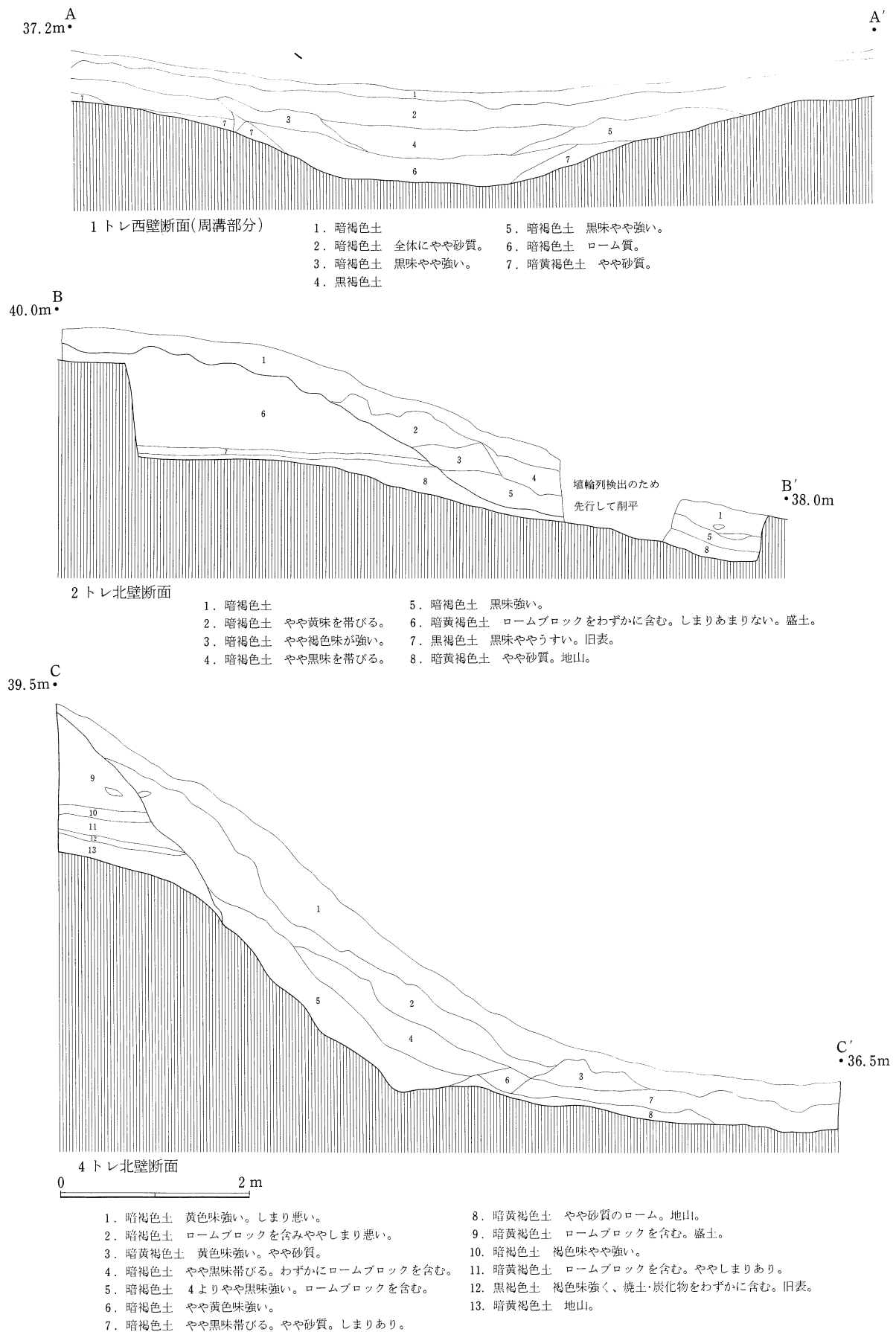
第4図 小谷1号墳トレンチ配置図(1/300)

主体部については、第1トレンチの墳頂部において、須恵器の大甕が検出され、その付近に存在する可能性が高かったが、さきに触れたとおり御神木がうわっており、トレンチの拡張は困難であり、甕の出土状況を把握するにとどまった。なおこの御神木の移植工事に立ち会った際に、太刀の柄の部分が出土したが、その時点で工事を一旦ストップし、周辺を精査したが、主体部を思わせる遺構の痕跡は認められず、また他の副葬品の出土はなかった。

これらトレンチ調査の結果をふまえ、以下のように調査を続行した。埴輪列の全体の検出につとめる。後円部に関しては、可能な限り表土を除去するとともに周溝の続きを追求する。なお、住居跡部分に関しては先に述べた通りである。

拡張後の全体的な成果について述べる前に、トレンチ調査の成果として、埴丘の盛り土の状況についてここで述べておくことにする。盛り土に関しては、全てのトレンチを旧表土以下まで掘り下げることは時間的にも不可能な状況であり、後円部の2・4トレンチにおいてそれが可能であったにすぎない。これをもって全体のこととするのは問題のあるところであり、後円部に限ったのことで理解していただきたい。ただし、上に述べたように後円部南側以外では周溝を欠くところから、実際に盛り土はなく、地山の整形のみで埴丘を形作っていた可能性も考えられるところである。

この第2トレンチの断面を観察したところでは旧表面と考えられる、黒味の強い土層が存在が明らかとなった。この層は厚さは10cmにも満たない薄い層である。地形上の制約からか黒色土の発達が不十分であったのかもしれない。この土層中にはわずかながら、焼土が認められ、盛り土以前に一度、下草を焼いたのかも知れない。この層より上層が盛り土と考えられるが、それは比較的均質な、やや砂質の多い黄色味の強いロームの単一の層であり、黒色土等の混在は、ほとんど認められ



第5図 1・2・4トレ断面実測図(1/60)

なかった。墳丘の築造としては比較的簡便な方法がとられたと判断しうる。同時に硬く突き固めた印象を受けるものではなかったことも、付け加えておきたい。

なお、他のトレンチの断面図も合わせて掲載しておく。

3、前方部埴輪列

前方部北端で検出された埴輪列の連続状況を確定するために、この北端から南にむかって、埴輪列検出のみを目的として、表土を掘り下げた結果、次ページに示したような状態で埴輪列が検出されるに至った。前方部からくびれ部を経て、一部後円部にまで連続している。ここでは、これらを一括して「前方部埴輪列」として報告し、後円部東側で検出された埴輪列に関しては、後円部の調査の項で触れることにする。

この部分で検出された円筒埴輪の個体数は40をこえる。形象埴輪は検出されていない。円筒埴輪のほとんどが普通円筒で、朝顔型は5個体であることが整理の結果判明した。調査時点の埴輪の残存状況は、北側ほど良好であり、いずれも東側へ傾いた状況が見て取れた。古墳全体の中での樹立の位置に関しては、前方部斜面部上方に配置されたものと考えられる。また、北端部分については、図示した部分より北側については、これ以上存在しない。それにより、この端をコーナーとして西に埴輪列が西に伸びる可能性も考えられたが、崖面の観察、ボーリングステッキの貫入等の検討の結果、西には伸びてこないと判断され、したがって、この部分をもって、埴輪の樹立は止まっていることとなり、前方部北面は開放されていると判断される。

埴輪の樹立の間隔については、総体的に心々間は30cm～40cmである。設置の仕方については、精査しきれず、布掘りか壺掘りかについては言及しえない。

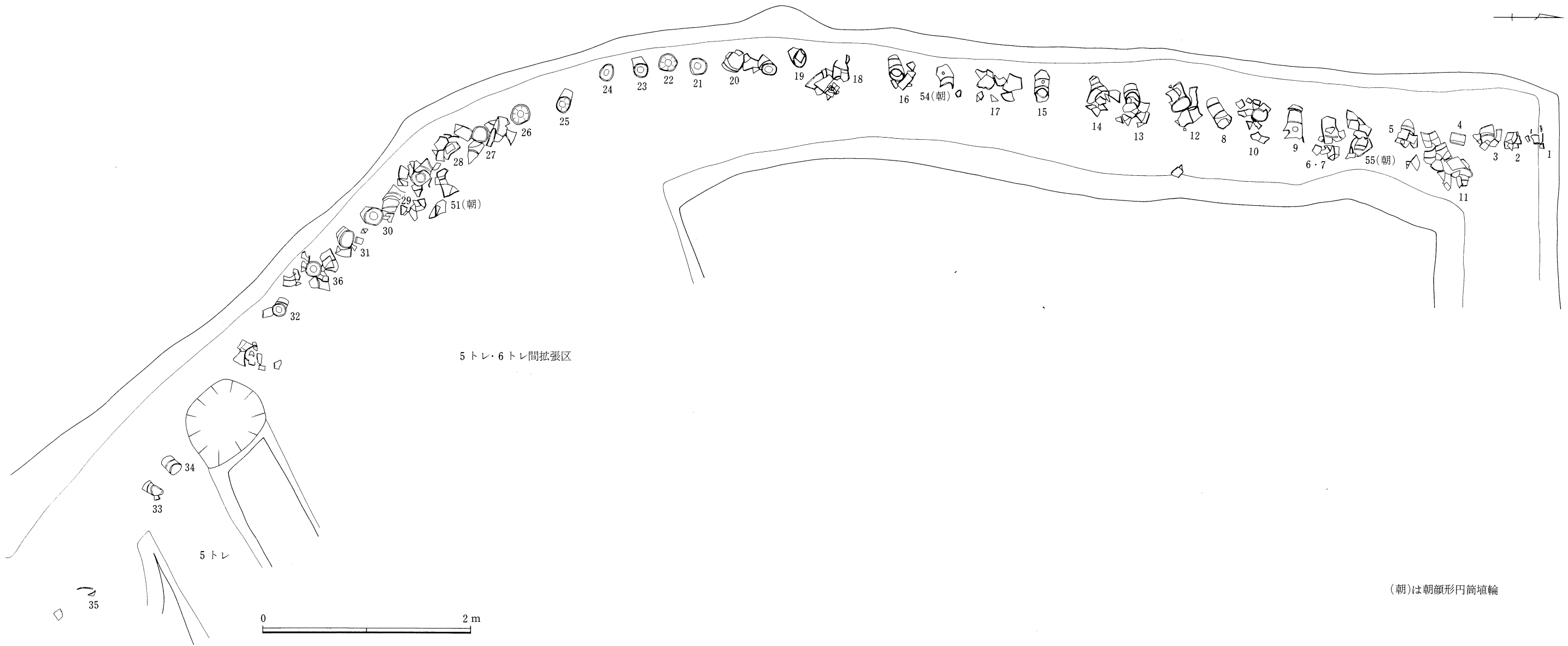
また、前方部から後円部にかけての部分について、特に明瞭な形で埴輪列を屈曲させたような配置の仕方は認められず、なだらかなカーブを描いて前方部から後円部へと連続して樹立させたものと判断される。なお、この部分(5トレ・6トレ間)は、形象埴輪の存在の可能性が考えられたため、トレンチ間を拡張したが、その存在は破片中にも確認されなかった。ただし、西半を大きく欠いている状況であるので、当初より全く欠いていたとは断言できない。西側を意識して、西に偏らせて形象埴輪を樹立していた可能性も考えておくべきであろう。

4、後円部の調査

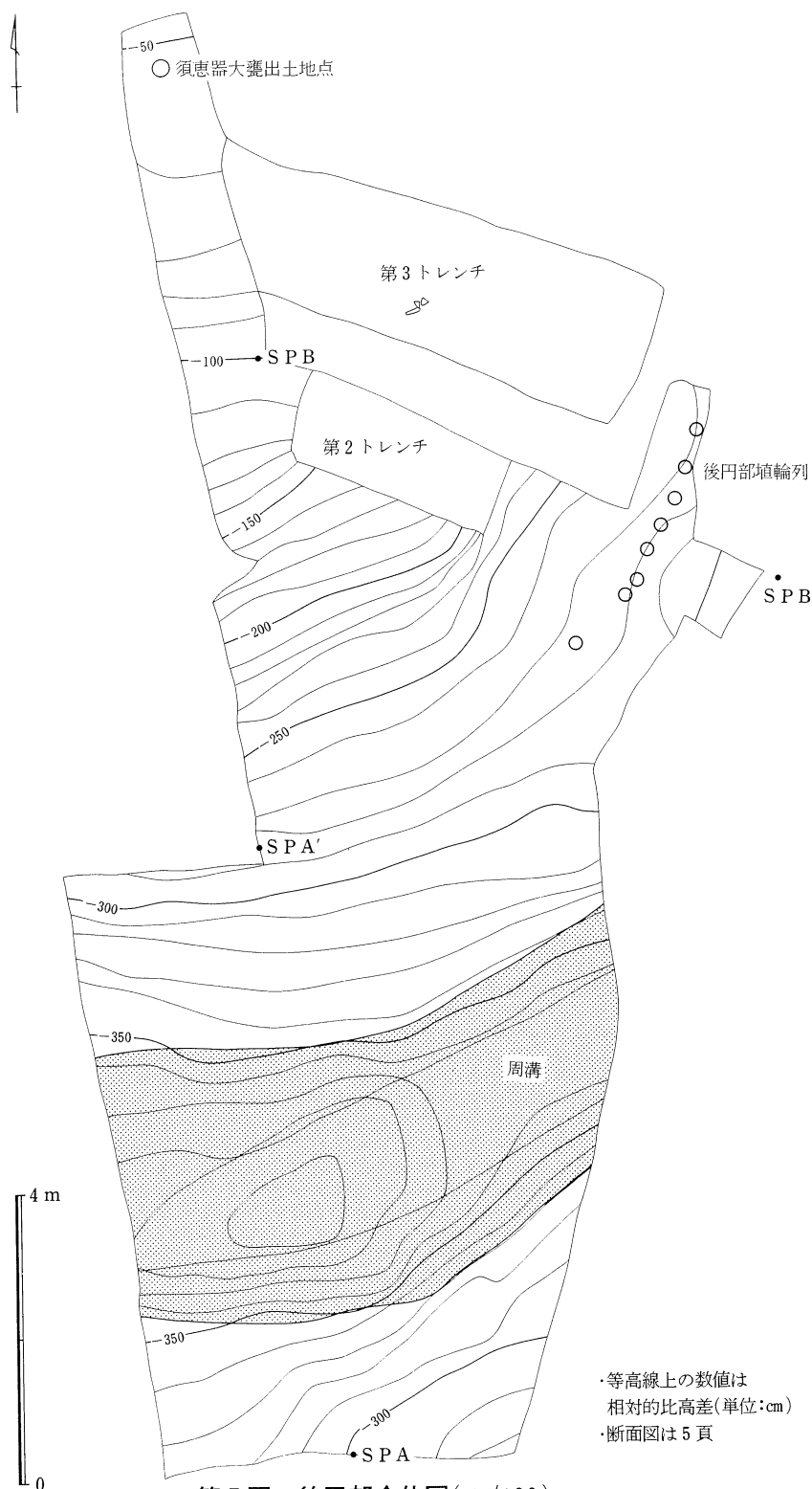
トレンチの調査結果をふまえ、後円部に関しては表土の除去を行い、周溝を極力広い範囲にわたって検出するとともに、埴輪列の検出につとめた。結果的には、図示したような状況となった。

周溝は、上端の幅が約4m、下端は必ずしも明瞭ではなかったが、大略1.5m前後を計る。確認面からの深さは約50cmであった。周溝底面上には、やや黒みを帯びた、砂質の多いロームが堆積していた。黒色土の発達が進んでいない状況に関しては、墳丘の項で述べたのと同様なことが周溝の覆土においても指摘し得る。第1トレンチの調査にさいして周溝内から大量の埴輪片が出土したことは先に触れたとおりであるが、そのような状況は、拡張した部分全体においても変わらなかった。調査に際しては出土地点をプロットしたが、本報告では紙面の制約上、割愛させていただいた。

また、この拡張により、周溝の径もおおよそ復元可能となった。円弧の中心を、第1トレンチの墳頂部からわずかに南に寄った箇所に想定すると、上端で内径15m、外径19mという数値を想定し得る。ただし、この数値は、検出し得た周溝の数点を通過する事を前提として導いたものにすぎず、これに



第6図 前方部埴輪列検出状況(1/40 番号は挿図・表と一致する)



第7図 後円部全体図(1/100)

倒壊後の流入によるものと考えられる。

樹立の間隔については、基部が原位置にとどまっていたものが少ない状況にあり容易に云々できないが、おそらく前方部と同様、心々間30～40cmであったのではないかと考えられる。

古墳全体の中の位置としては、墳丘の裾に位置することはいうまでもない。それが、前方部側に行

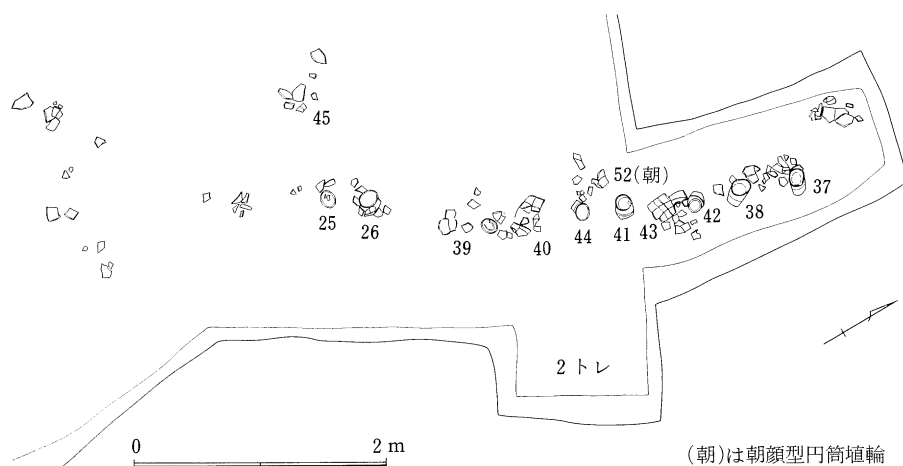
よると、全体に一回り大きくなることが予想されるので、実際にはそれぞれ上記数値を下回るものと考えておきたい。周溝上端から墳頂にかけては連続する斜面が形成されているが、特にテラス状の平坦面を有していたとする根拠には欠ける。

第2トレンチの断面観察によれば、旧表面はこの墳丘の中位よりやや下に認められるべきものであるが、平面的にそれを認知するのは困難であった。

なお、旧表の位置が若干高いことは、墳丘の盛り土の以前に、既に裾部の整形が行なわれていたことを示唆するものであると同時に、周辺の削平も想定される。

後円部の埴輪列については次頁に図示したような状態で検出された。前方部のそれと比較すると残存状況はやや悪いといえる。かろうじて、8個体が、樹立当時の位置を示しているにすぎない。おそらくは、基部の埋め込みが前方部に比べて浅い位置にとどまっていたことによるのであろう。周溝の調査に際して出土した大量の破片は、埴輪列

・等高線上の数値は
相対的比高差(単位:cm)
・断面図は5頁



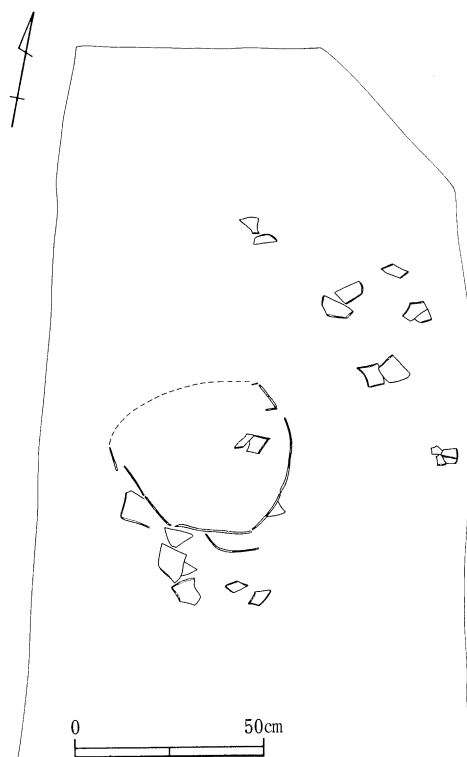
くにしたがって、やや墳丘を上っていく形になって、前方部の埴輪列につながったものと理解しておきたい。ただし、この間の部分については土砂の流出が認められ、埴輪列は残存

していない。この、
第8図 後円部埴輪列検出状況(1/60, 番号は挿図・表と一致する)
 後円部から前方部にかけてについては、正円を呈する埴輪列を想定する必要はないが、今回検出した部分に関しては、おそらく円形の配置を意図したものと考えられる。東側に偏った位置の資料のみで円弧を復元するのも大きな誤差を生む可能性が高いが、現状ではそれ以外に方法もないところである検討の結果、これら後円部の埴輪列は、直径約10mの円周上に配置されたものと想定しうる。

なお、これら以外の部分において埴輪の据え付けを示すような痕跡、たとえばピット等、については、確認し得なかったことを、ここでつけ加えておく。

5、墳頂部

墳頂部に関しては、再三述べてきた通り、御神木の存在により、十分な調査ができなかったが、主体部との関係が考えられる遺物の出土が認められた。それは、須恵器の高坏と大甕が近接した箇所



出土したことである。大甕については、第1トレンチの調査に際して検出されたものである。残存状況は必ずしも良好とはいえず、木根の周りに散布しているような状況であった。ただし、そのような散布している破片を除去したのちには、比較的大型の破片が得られ、墳頂上に据えられた時点の位置を保っているものと判断された。調査時点においては、その残存部位については確認しておらず、倒立でないことは明らかであるものの、正立か、傾けられていたと考えられる状態であったかについては言及し得ない。

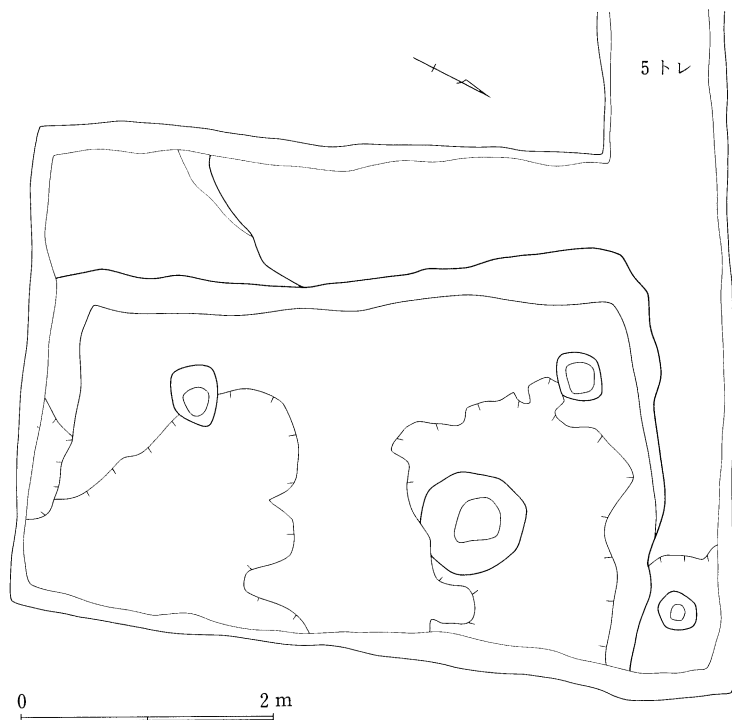
また、甕の内部からは、遺物の出土はなかった。

なお、この大甕の内面の当て具の痕跡には明瞭な「車輪文」の認められることが特筆される。詳細については、遺物の項で触れることにする。

この大甕から1m程北側の第8トレンチの南隅付近においては、須恵器の無蓋高坏が検出された。坏部を一部欠くものの、ほぼ完形に復元された。

これら比較的状态の良好な遺物が検出されたところからこの付近に主体部が存在することが予想されたが、それをおぼろげに、落ち込み等は確認できなかった。

第9図 墳頂部須恵器大甕出土状況(1/20)



第10図 住居跡実測図(1/60)

い。覆土中からは多くの埴輪片が出土したが、この住居に伴うと認定し得る遺物の出土は認められなかった。

この住居の性格に関しては、判断する材料を欠くが、カマドを当初から欠くような住居であるならば、その立地から考えて、古墳との関連性の強い住居であった可能性が強いことだけは指摘し得る。

第4章 遺 物

1、埴輪

今回出土した円筒埴輪は以下に図示するとおりである。他に多くの破片資料が出土していることは言うまでもないことであるが、掲載遺物以上の情報を提供するものではないと判断されたので、破片資料については割愛した。

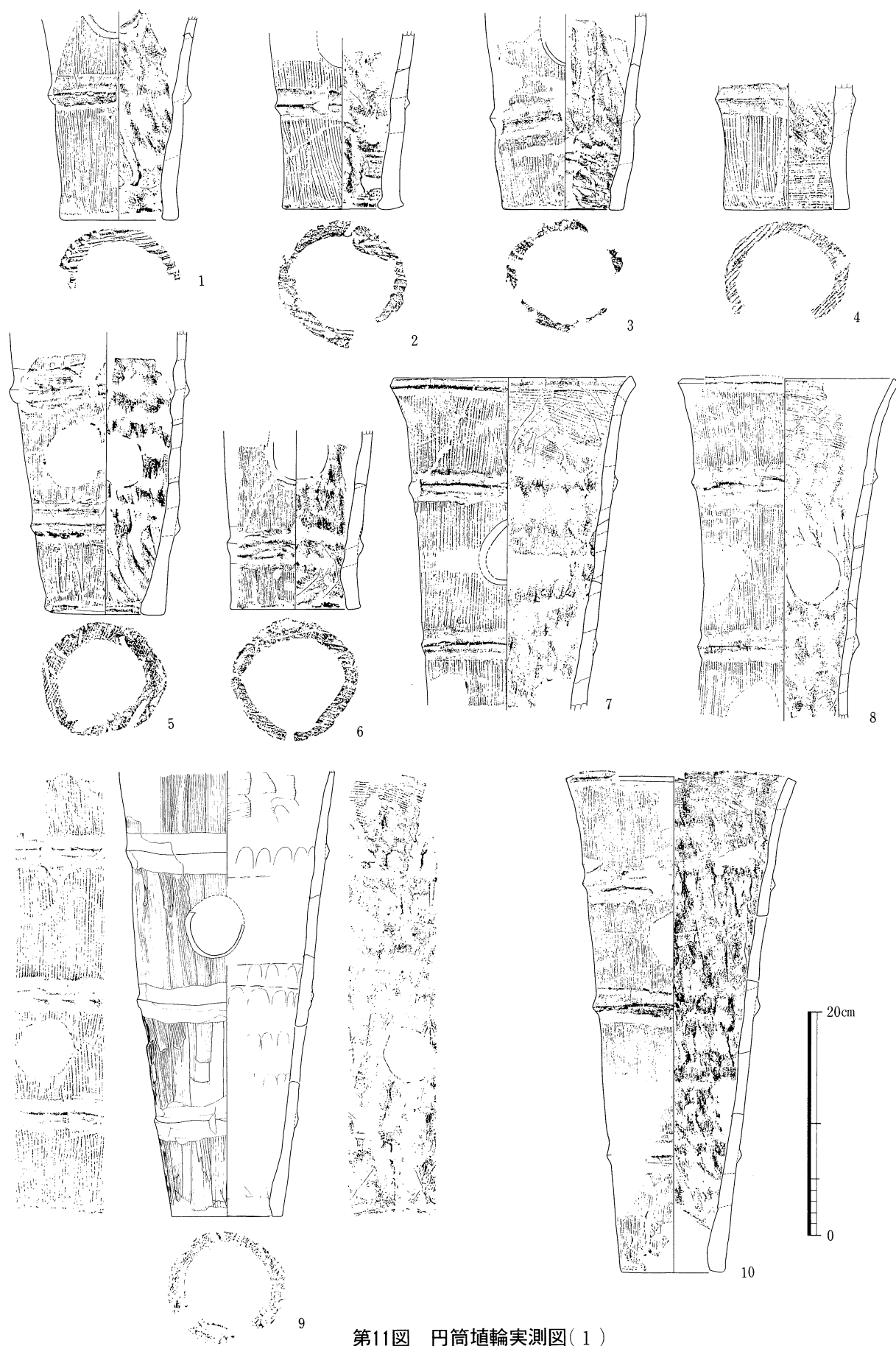
図示した55個体のうちには、朝顔型、あるいは突帯の位置等からそれと判断されたものが5個体ある。また、基部から口縁部まで復元しえたものは、朝顔型1個を含めて18個体に及んだ。個別の特徴、計測値については観察表にまとめてあるので、そちらを参照していただきたい。なお、参考までに、諸計測値の統計処理の結果について記しておく、器高は平均45.4cm、標準偏差1.5。口径は同じく20.7cm、1.5。底径は10.8cm、0.6。最下段突帯までの高さは8.8cm、1.2であった。したがって、総体的なイメージとしては、底径:口径:器高は、ほぼ1:2:4.2となり、やや細身の印象を受ける。また、厳密な統計上の検討は経ていないが、数値上のばらつきも少ないと思われ、同一の母集団に属すると判断してよいのではないかと考えられる。本来ならば検定作業を経おくべきであろうが、その点については怠ってしまった。御寛容願いたい。

個別の属性をある程度捨象して、総体的にみれば、普通円筒に関していえば、3条4段のもののみで構成されており、突帯の断面形はほとんどが三角形である。また、最下段の突帯の位置は比較的低い部分に位置している。内面の整形は、口縁近くにヨコナデをほどこすのみである。底部整形につい

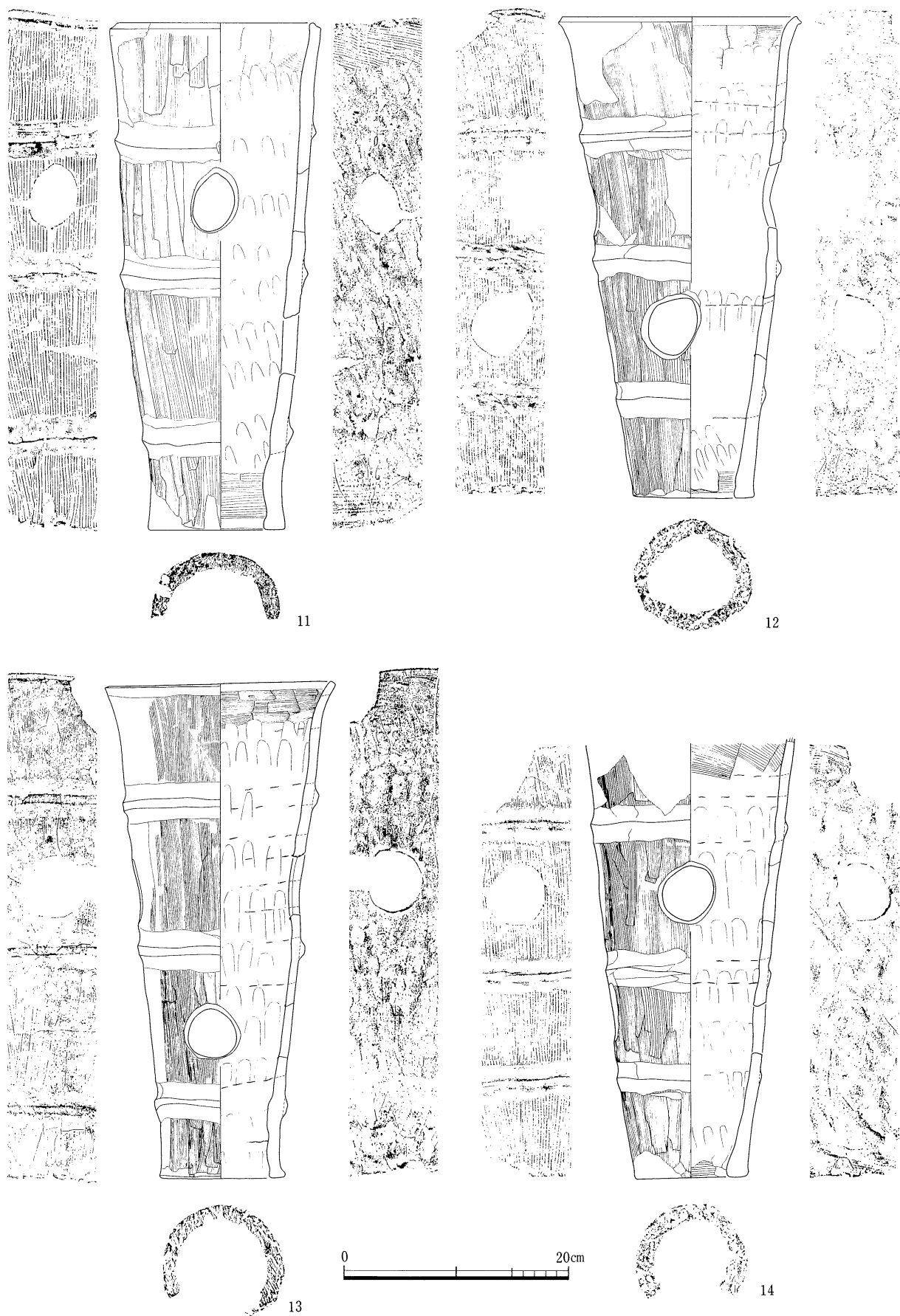
6、住居跡

第5トレンチ下方の南壁際において溝状の落ち込みが認められ、当該部分を拡張したところ、図示したような住居跡が検出されるに至った。東側はおそらく土砂の流出により欠失したものと考えられる。西側の一边のみが全長を知り得る部分であり4.6mを計る。柱穴については2か所検出された。床面の残存状況は良好ではなかったが、西半は比較的硬い床を残していた。

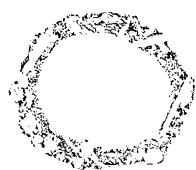
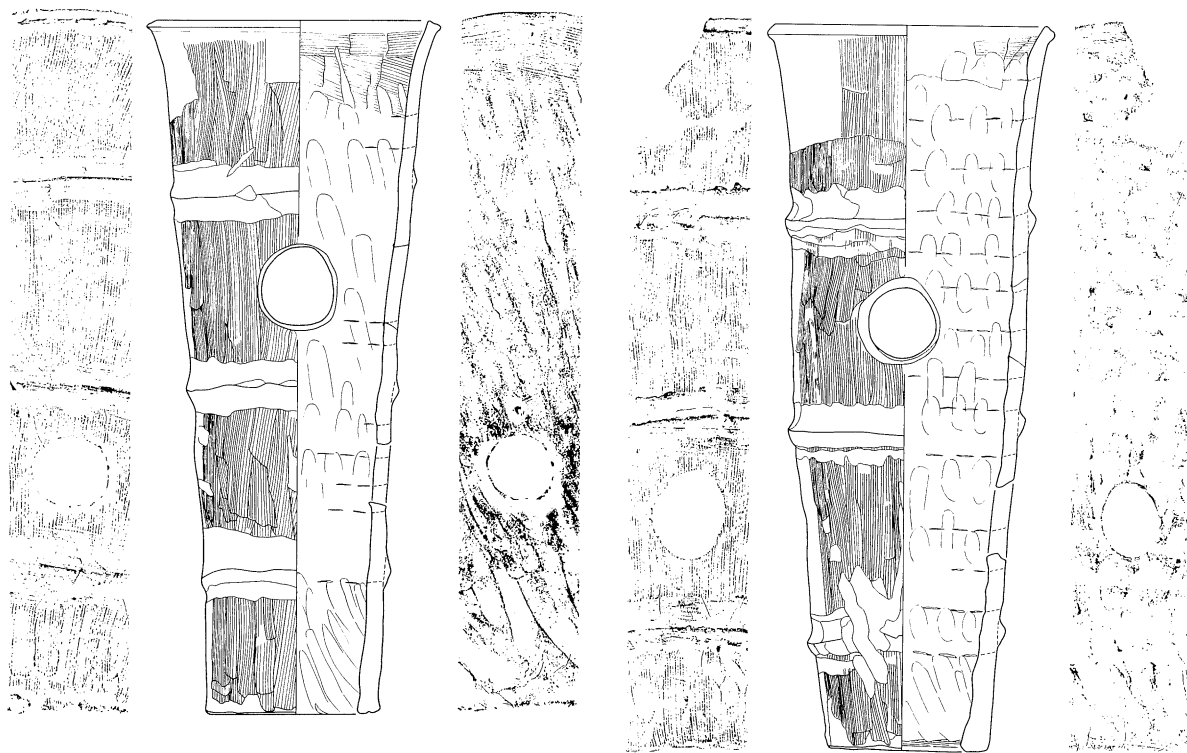
カマドの存在を伺わせるものはなく、また炉・焼土も検出されていない。



第11図 円筒埴輪実測図(1)



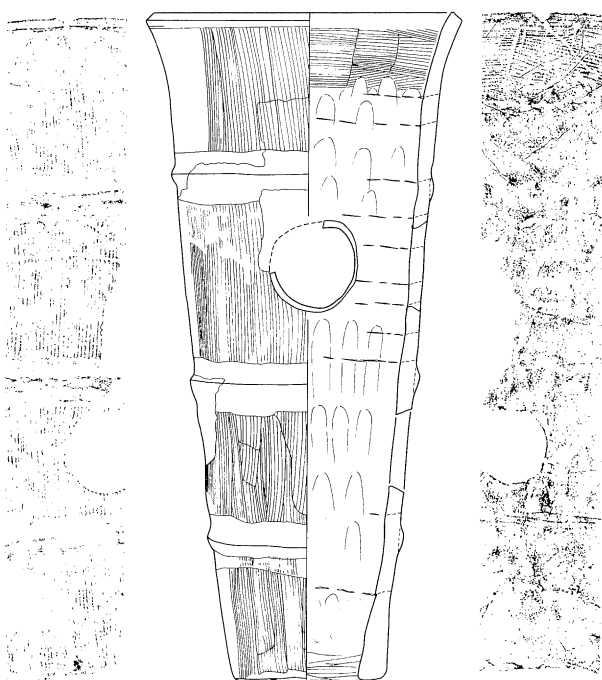
第12図 円筒埴輪実測図(2)



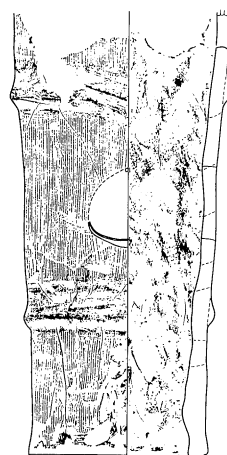
15



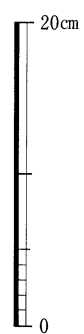
16



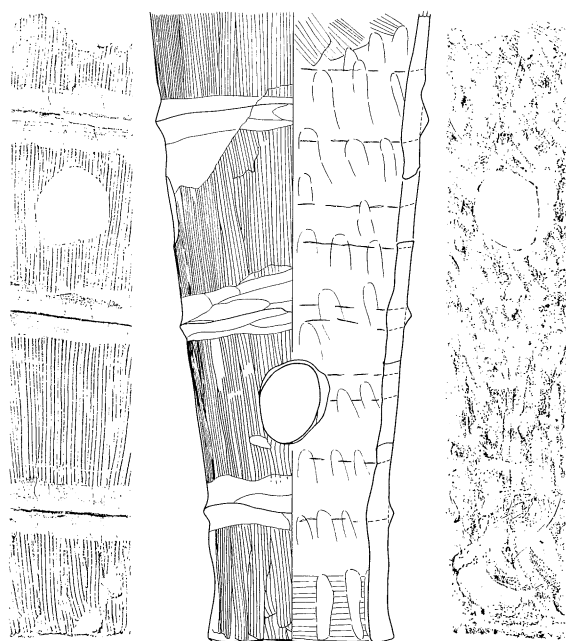
17



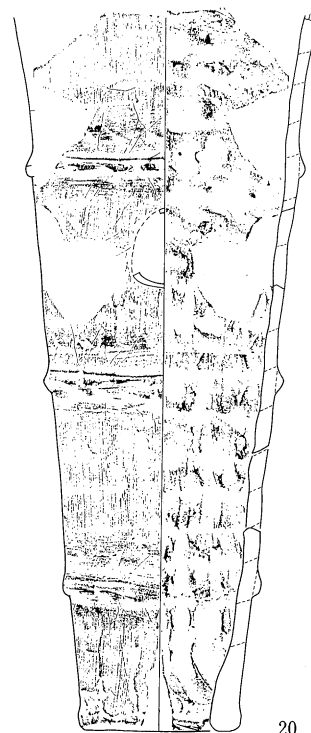
18



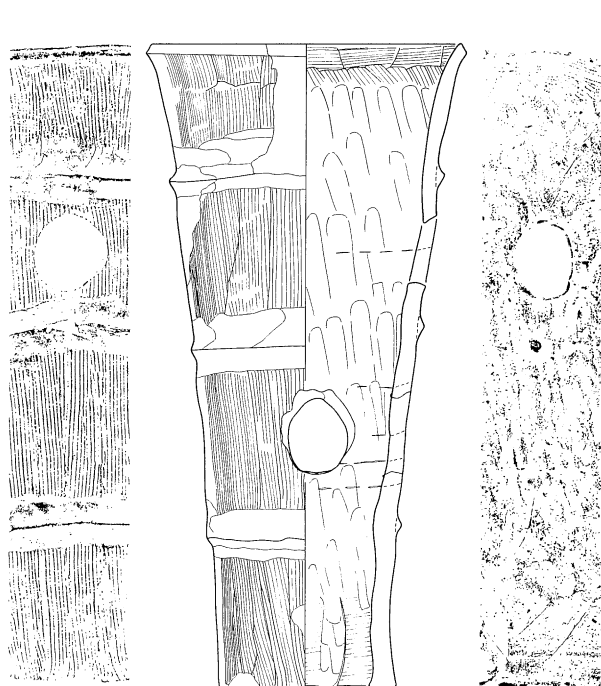
第13図 円筒埴輪実測図(3)



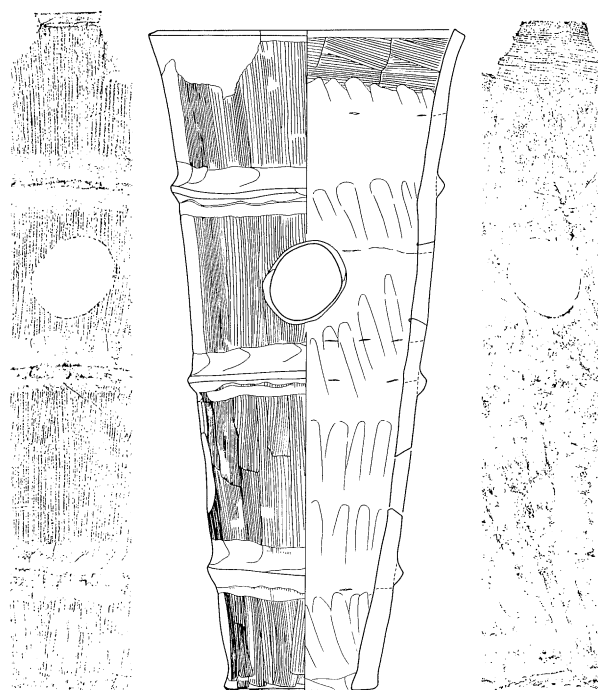
19



20

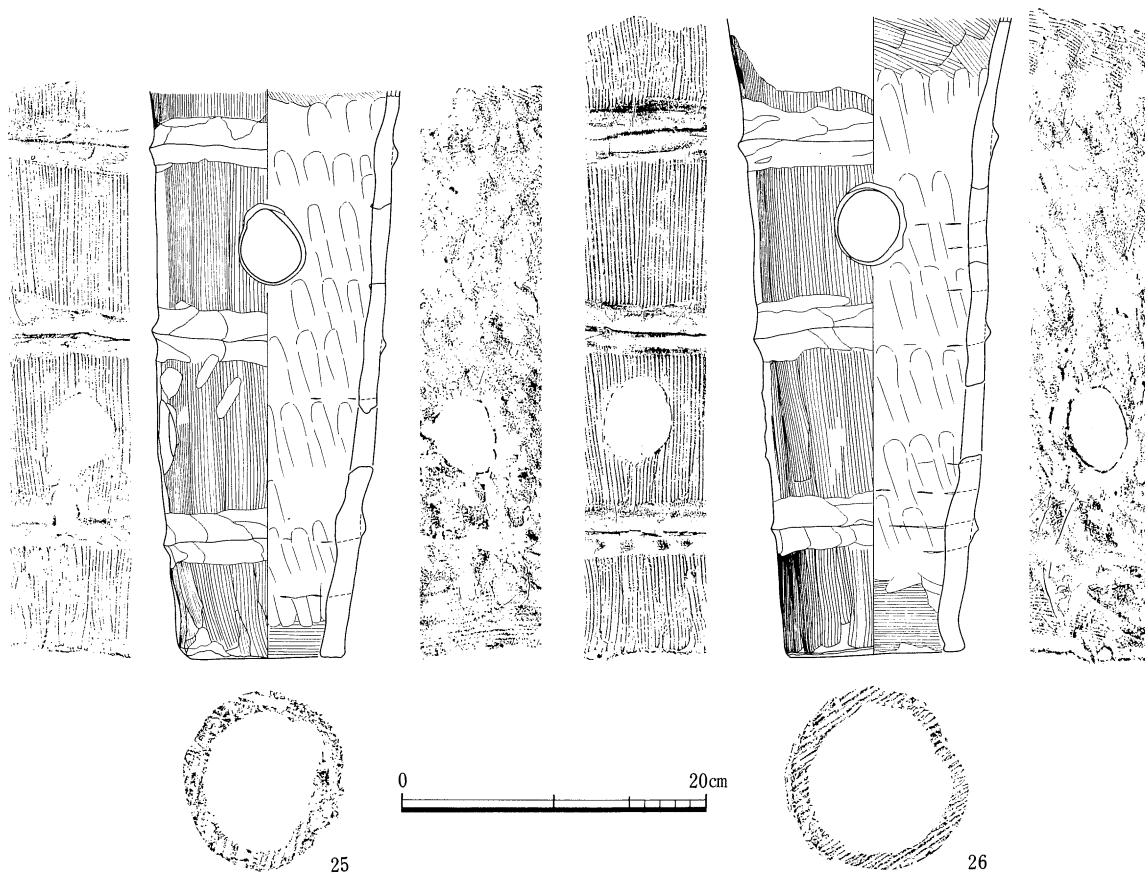
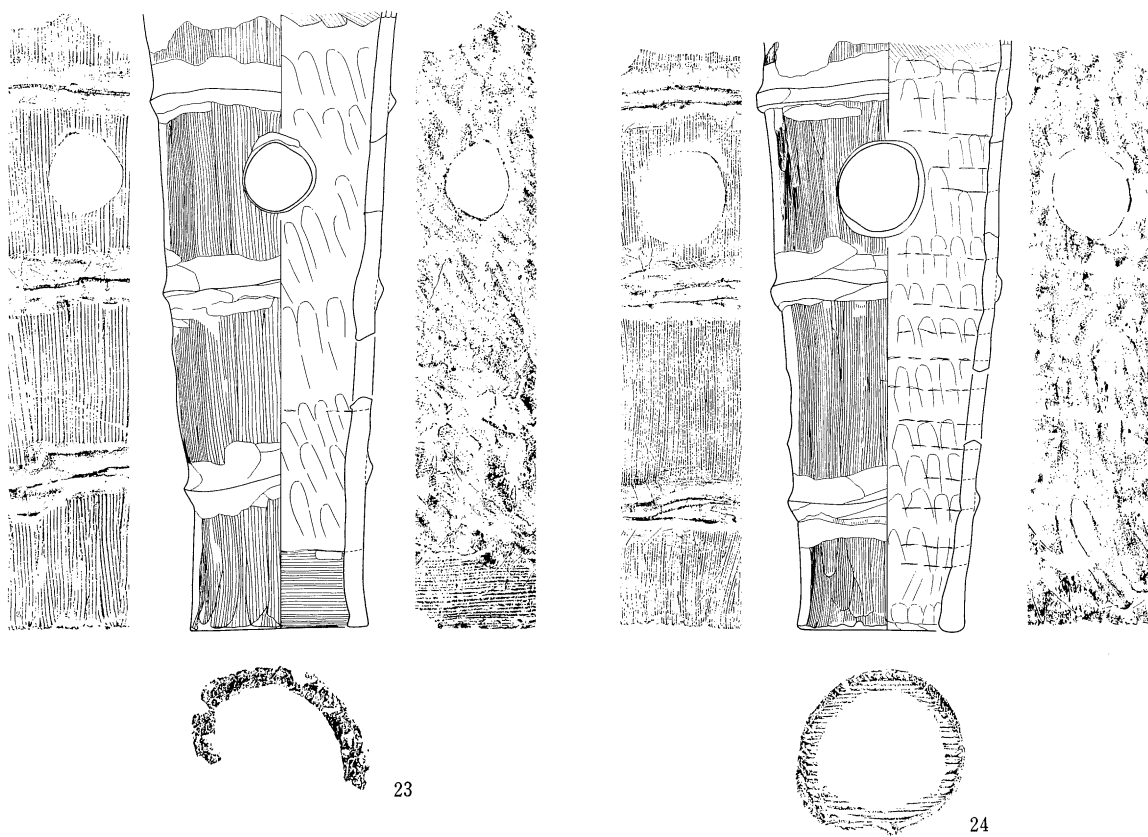


21

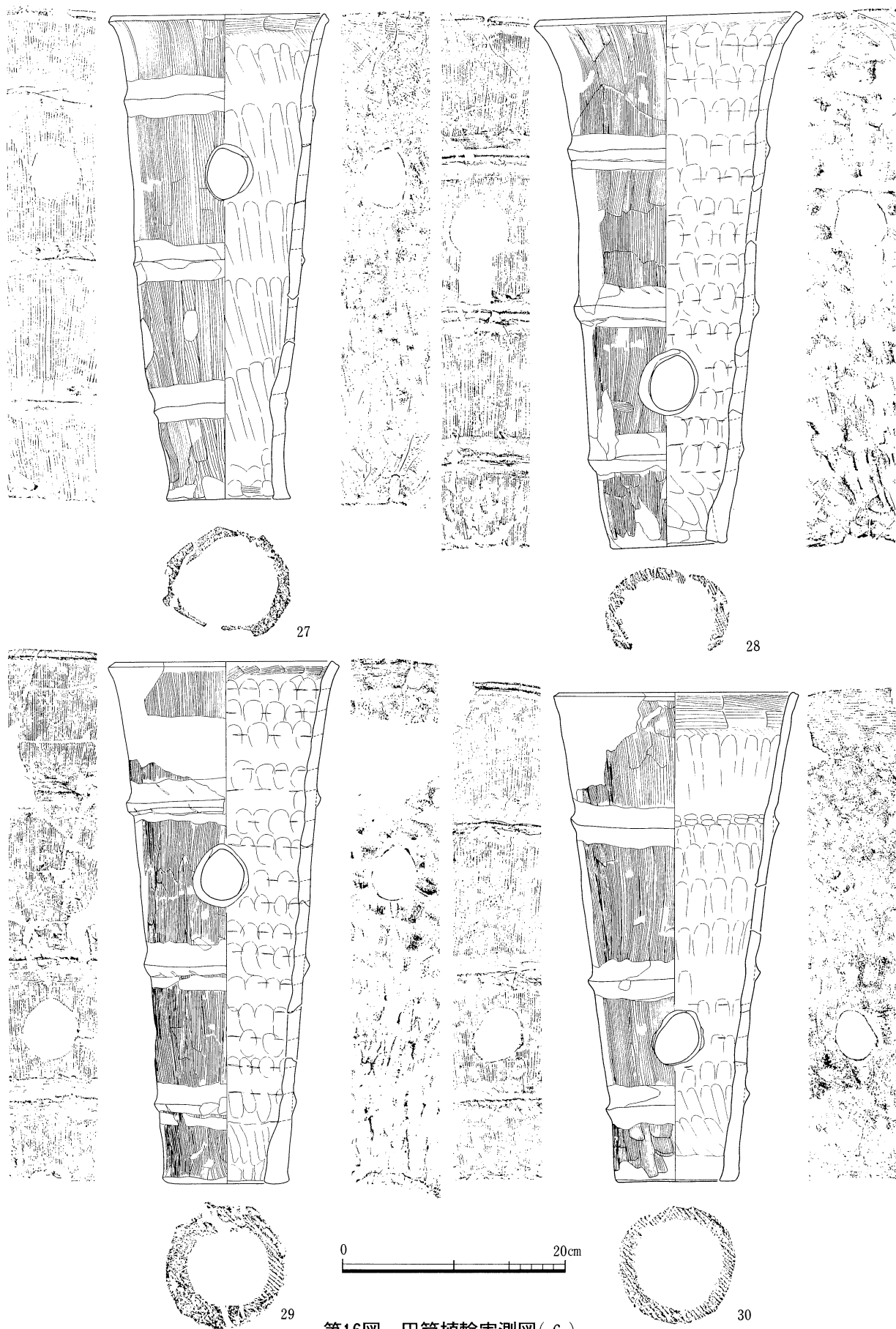


22

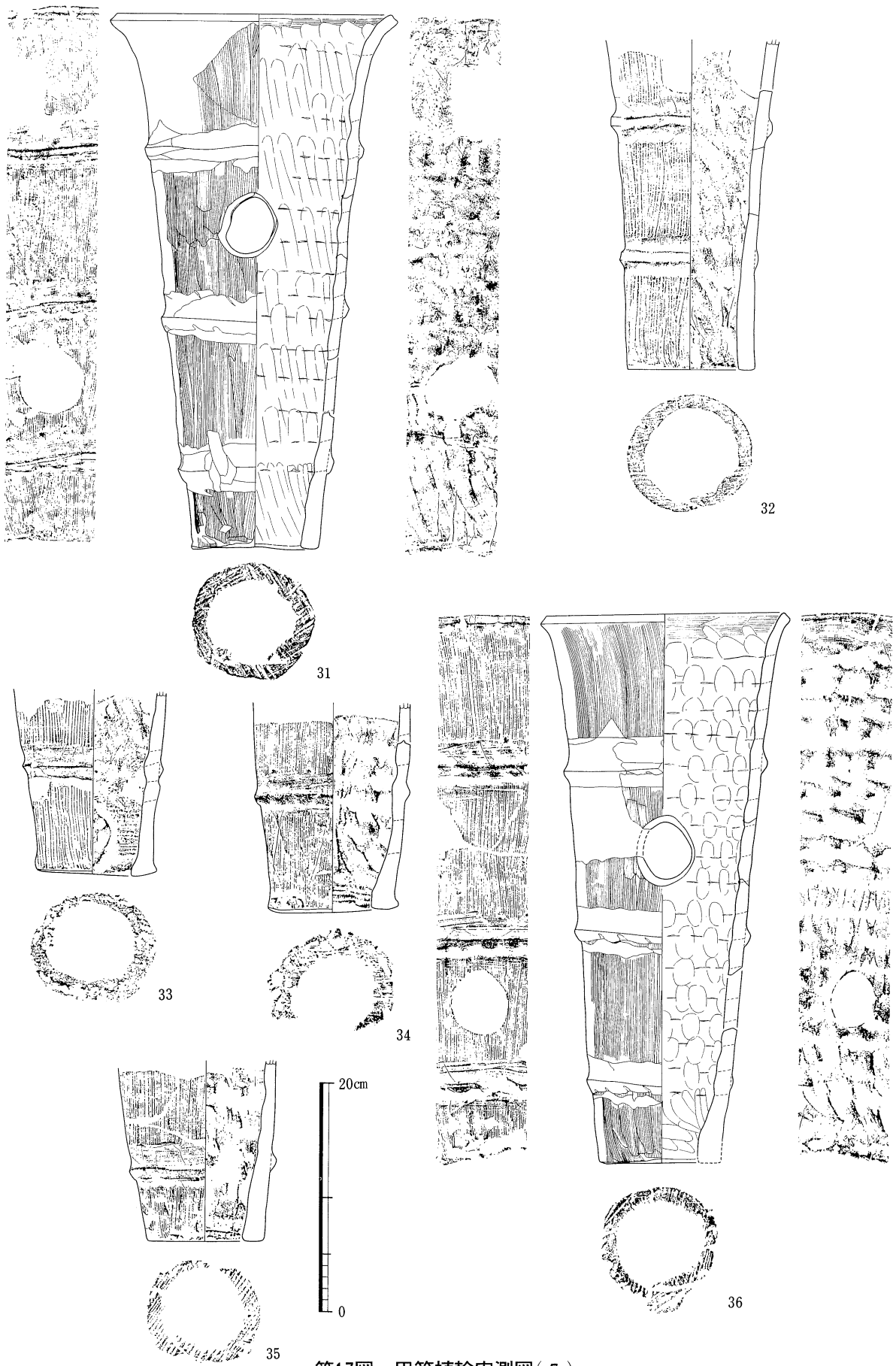
第14図 円筒埴輪実測図(4)



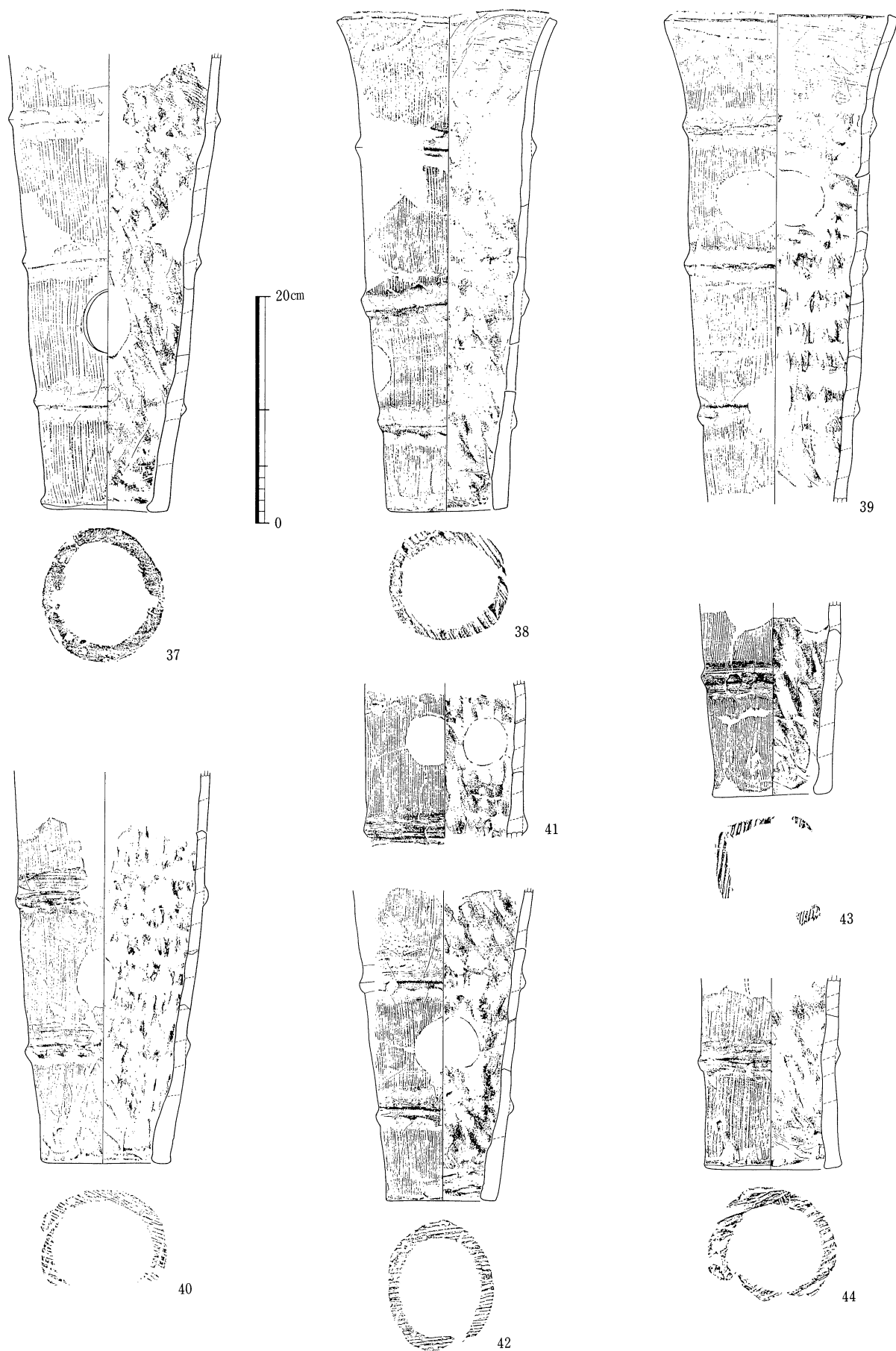
第15図 円筒埴輪実測図(5)



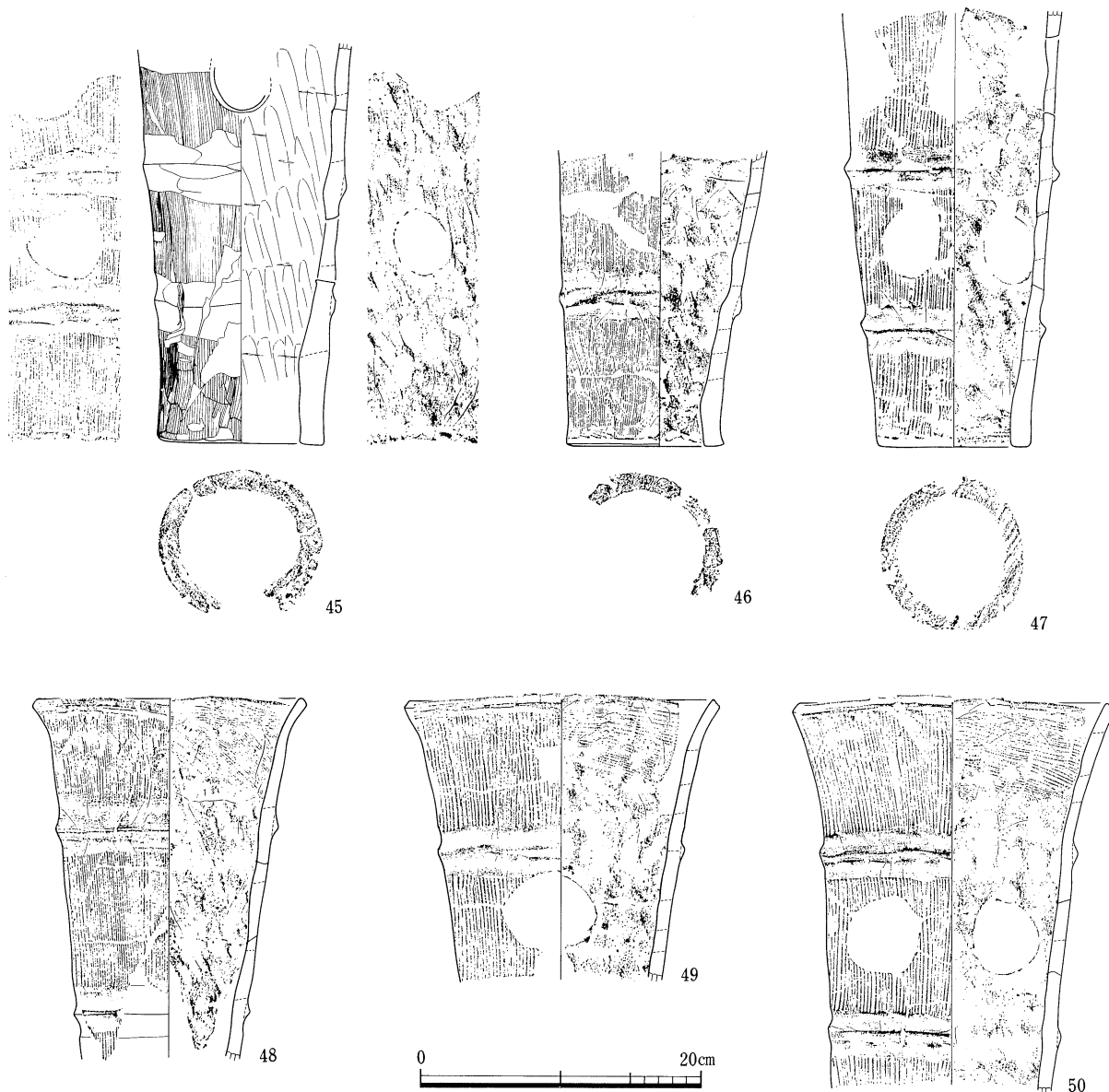
第16図 円筒埴輪実測図(6)



第17図 円筒埴輪実測図(7)



第18図 円筒埴輪実測図(8)

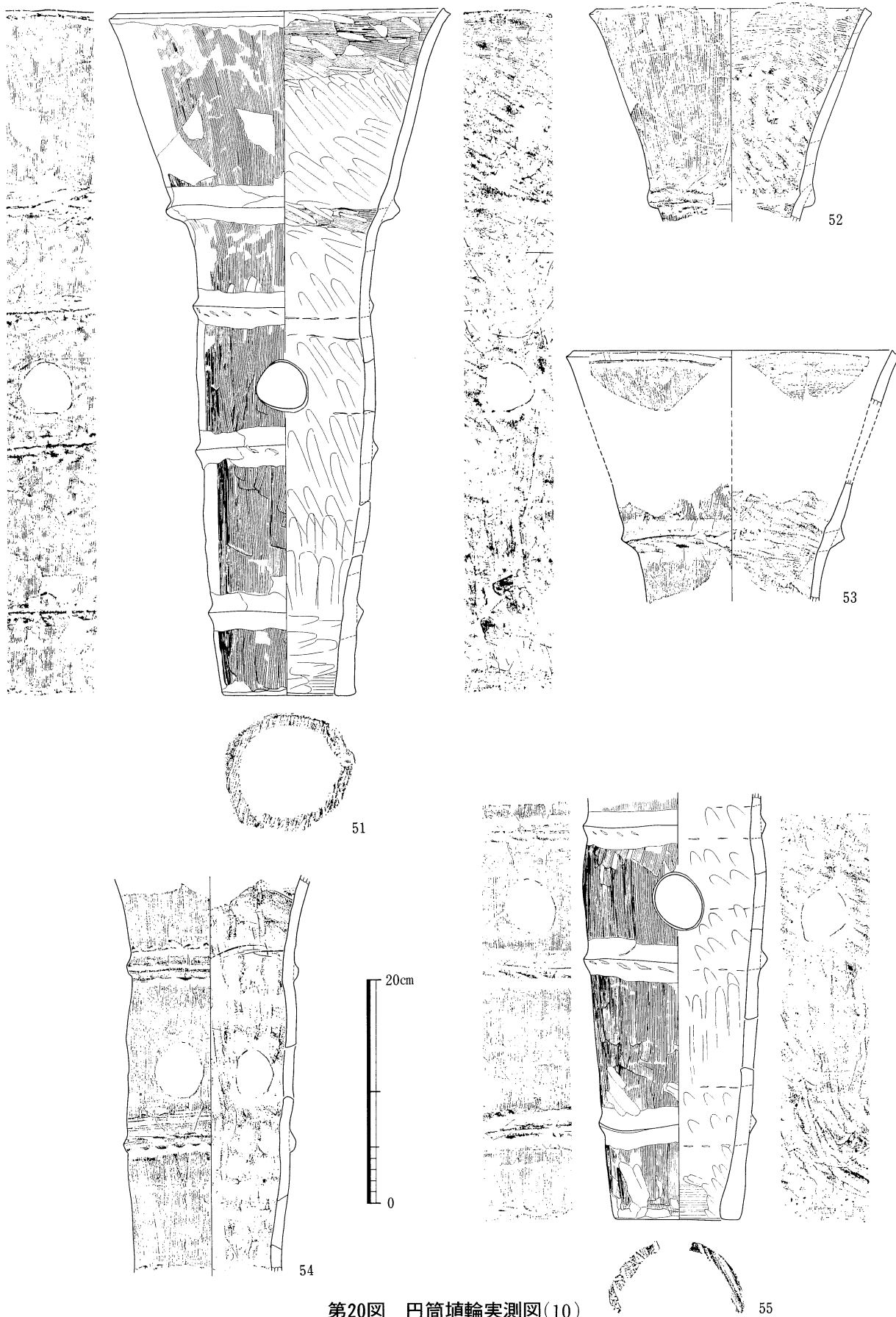


第19図 円筒埴輪実測図(9)

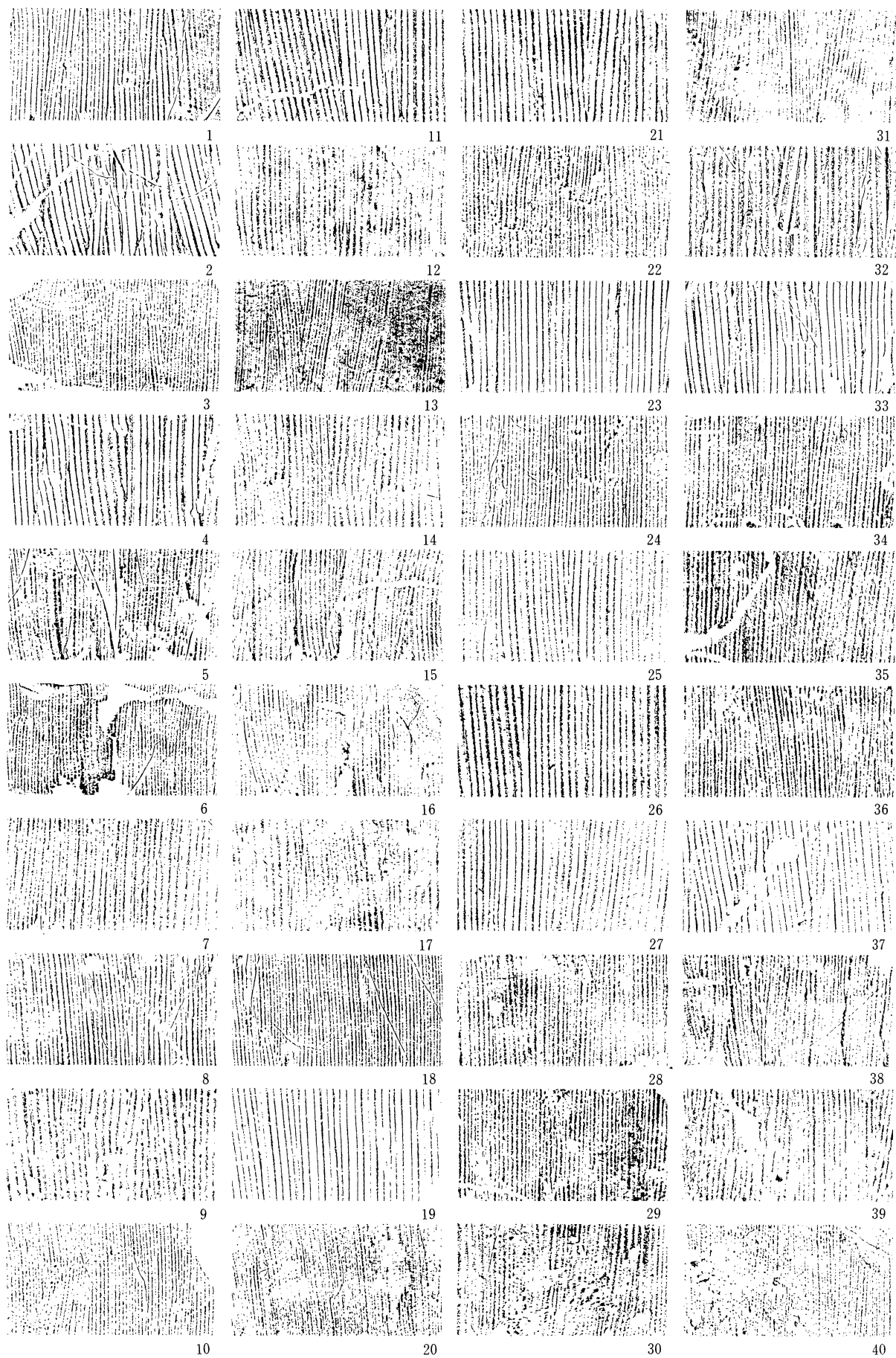
ては、それを施したと考えられる資料は認められない。以上の点で共通する。したがって、千葉県内のこれまでの研究の成果をふまえると、「下総型埴輪」の範疇でとらえられる一群であると考えられる。

市原市内においては、これまでに約20か所で埴輪が検出されているが、「下総型」あるいはそれに近いとされる埴輪は、今回の資料を含めて3か所で検出されているのみである。「下総型」とそれ以外の埴輪との時間的な関係に関しては、いまだ未確定の部分もある。今回の資料が、ある程度の指標になるのではないかと考えられるが、今後の検討に委ねておきたい。

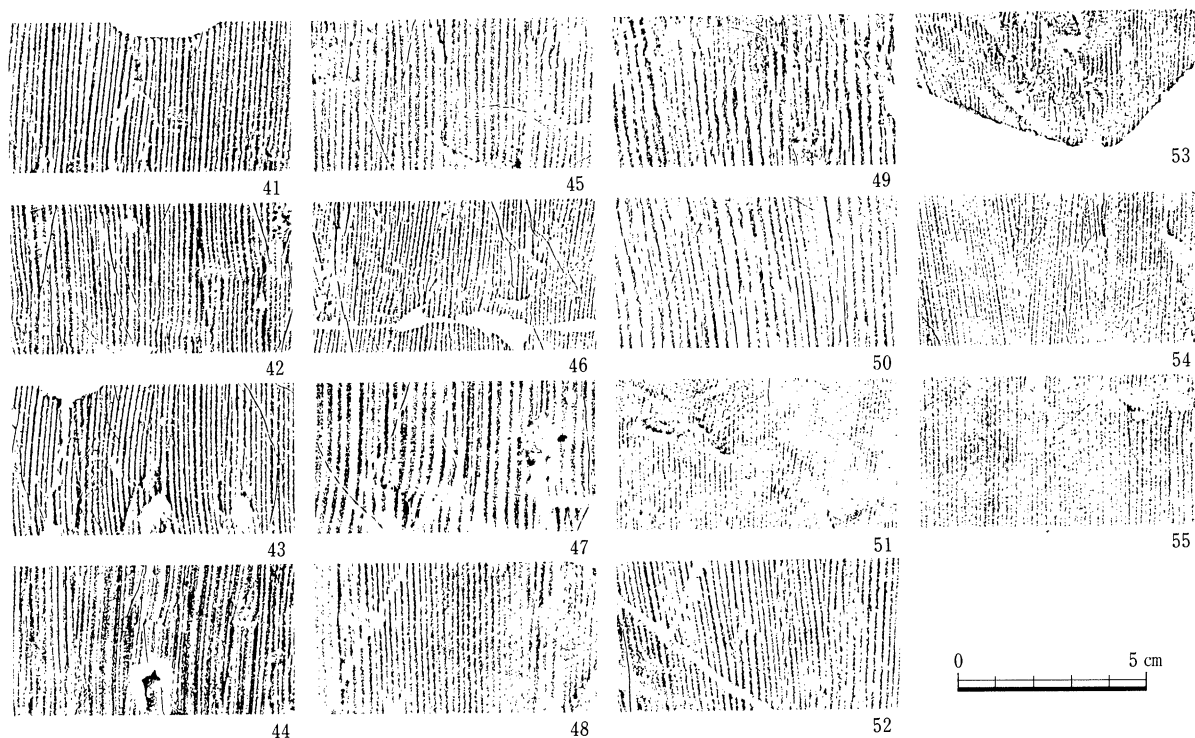
なお、参考までに、これまでに市原市内で出土した埴輪の一覧表を23頁に掲載しておいた。いずれも文献から抽出したものであって、実見したものはわずかである。また、すべてについて共通する部分については表には表現していない。それは、外面一次調整タテハケ・突帯間孔数2・突帯間孔形は円形・黒斑を欠くという以上の4点である。これは、川西宏幸氏の円筒埴輪の編年指標を軸にしたものである。したがって、別の指標の抽出(たとえば、姉崎古墳群の埴輪に関して最下段の幅が数cmにとどまるという特徴を有することなど)に関しては、積極的には取り込んでいないことを、あらかじめお断りしておきたい。個々の文献を参照されたい。



第20図 円筒埴輪実測図(10)



第21図 円筒埴輪刷毛目拓影(1)



第22図 円筒埴輪刷毛目拓影(2)

第1表 市原市内出土円筒埴輪一覧表

遺 跡 名	所 在	外面B種ヨコハケ	内面ハケ	突帯形	突帯数	備 考	文 献
国分寺台350号墳	国分寺台	○(目立つ)	—	—	—		10
持塚1号墳	〃	○(少ない)	全面?	台形?	3		9
南向原4号墳	〃	×	全面(ナナメ)	台形	2		7
西谷10号墳	〃	×	全面タテ	台形	2		9
根田1号墳	〃	×	上端のみ	三角形	3		9
山倉1号墳	〃	×	全面	台形	2	底部調整あり	4
御蔭目浅間神社古墳	低 地	×	全面(ナナメ)	台形	2, 3		12
君塚天神山古墳	〃	×	上端のみ	三角形	3		9
姉崎二子塚古墳	姉崎古墳群	○	—	—	—		11
原1号墳	〃	×	全面(ヨコ)	台形	2+		11
山王山古墳	〃	×	全面(ヨコ)	台形>三角形	2+		8
鶴窪古墳	〃	×	上端のみ	台形、三角形			11
上野台遺跡	二子塚に隣接	○(少ない)	全面	台形	1+	二子塚からの流入か?	14
吉野1号墳	養老川中流左岸	×	上半	台形	2+		13
春日神社古墳	養老川中流右岸	×	確認できず	台形	3	表採資料	
菊間5号周溝	村田川下流左岸	×	全面(タテ、ナナメ)	台形	3		6
菊間手永遺跡	〃	×	全面(タテ)(少ない)	台形	3		
小谷1号墳	村田川中流左岸	×	上端のみ	三角形>台形	3		

第2表 小谷1号墳出土円筒埴輪観察表(1)

番 号	形 態	器 高	口 径	底 径	器 厚	透 孔				突 帯 高	刷 毛 目 数	色 調	胎 土	焼 成	成 形 ・ 調 整	備 考
						下 段		上 段								
1	普	18.7+	—	(10.5)	— — 0.7 1.4	16.2 — — —	— — — —	— — — —	— — — 11.2	15	A	A	A b	外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ	底部 板目 圧痕	
2	普	15.7+	—	10.7 ∪ 11.5	— — 1.0 1.4	12.7 — — —	— — — —	— — — —	— — — 9.2	9	A	A	B a	基部 右 外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ 基部 板目圧痕	底部 板目 圧痕	
3	普	17.6+	—	10.5 ∪ 11	— — 0.9 1.2	12.9 — — —	— — — —	— — — —	— — — 8.1	18	B	A	B b	基部 左 外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ 基部 板目圧痕		
4	普	11.4+	—	9.8 ∪ 11	— — — 1.4	— — — —	— — — —	— — — —	— — — 9.9	9	A	A	B a	基部 右 外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ	底部 板目 圧痕	
5	普	25.2+	—	10.5 ∪ 11.5	— 0.8 1.1 1.4	11.5 11.4 5.0 5.8	— — — 5.8	— — — —	— — 20.2 8	17	C	A	C b	基部 左 外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ	輪積み明瞭 底部 板目 圧痕	
6	普	16+	—	10.7 ∪ 11.1	— — 0.9 1.4	11.3 10.0 — —	— — — —	— — — —	— — — 6	14	C	A	C b	基部 左 外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ	底部 板目 圧痕	
7	普	29.8+	21.6	—	0.9 0.9 1.2 —		上から 19.5 4.9 6.0	上から 18.5 — —	上から 9.8 25.4 —	19	C	B	C b	外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ		
8	普	30.4+	19.4	—	0.7 0.9 0.8 —	— — — —	上から 18.6 5.0 5.1	上から 20.3 5.3 5.8	上から 9.5 21 —	13	D	A	B b	外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ	輪積み明瞭	
9	普	39.7+	—	9.75 10.4	0.6 0.9 0.9 1.0	11.8 11.2 5.0 5.4	23.1 24.2 5.2 —	24.2 4.9 5.5 —	32.6 — 19.4 8.5	9 ∪ 15	A	A	B b	基部 左 外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ 基部 板目圧痕	刷毛不規則 底部 繊維 圧痕	
10	普	45.4	20.6	(9.5)	0.8 1.0 1.0 1.3	14.6 — 4.7 5.0	— 26.7 — 5.1	— — — —	35.6 24.2 10.7 —	17	E	A	C c	外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ	底部 板目 圧痕	

第2表 小谷1号墳出土円筒埴輪観察表(2)

番 号	形 態	器 高	口 径	底 径	器 厚	透 孔				突 帯 高	刷 毛 目 数	色 調	胎 土	焼 成	成 形 ・ 調 整	備 考
						下 段		上 段								
11	普	45.2	18.5	11.5 ∪ 12 1.3 1.5	1.1 1.2 1.3 1.5	13.7 4.9 5.6	14 4.8 5.6	26.5 4.6 5.3	27.6 4.2 5.8	34.8 22.9 8	9	A	A	B b	外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ 基部 板目圧痕	
12	普	42.8	21.2	9.7 ∪ 10.6 1.1 1.3	0.8 0.8 1.1 1.3	12.4 5.1 6.3	12.5 5.3 5.6	24 5.6 6.1	23.5 5.5 5.6	32 21.2 9	10 ∪ 13	C	B	B b	基部 左 外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ	刷毛不規則
13	普	45.5	19.8	10.5 ∪ 10.7 1.0	0.8 0.9 0.9 1.0	11.1 5.0 5.2	11.3 4.6 5.4	23.6 5.1 5.9	24 5.3 5.6	35 21.2 6.4	20	A	A	B b	基部 左 外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ	底部部黒斑 底部 繊維 圧痕
14	普	39.8+	—	9.8 ∪ 10.1 1.2	0.9 1.0 0.9 1.2	11.2 4.8 5.2	12.9 4.9 5.4	23.2 5 5.5	22.8 — 5.8	32.4 19.1 9.3	11 ∪ 14	A	A	B b	基部 左 外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ	刷毛不規則
15	普	46.7	19.3	10.2 ∪ 11.5 1.2	0.8 0.9 0.9 1.2	13.8 4.9 4.6	14 5.6 5.4	24.8 5.9 5.8	25.8 5.6 5.8	34.9 21.9 9.1	14	E	A	B b	基部 左 外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ 口縁 横刷毛	底部 繊維 圧痕
16	普	49	18.8	9.9 ∪ 10.8 1.4	0.9 1.1 1.2 1.4	11.5 4.8 5.7	13 4.7 5.9	26 5.5 5.8	27.3 5 5.8	35.8 21.8 7.1	15	A	A	B b	基部 左 外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ	輪積み明瞭 底部 板目 圧痕
17	普	44.2	20.3	9.5 ∪ 9.8 1.2	1.1 0.8 1.0 1.2	12.3 — — —	12.6 — — 5.4	24.5 5.4 5.8	— — —	35.5 24.5 9.7	10 ∪ 14	A	A	B b	基部 左 外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ 口縁 横刷毛	刷毛不規則 底部 板目 圧痕
18	普	29.6+	—	10.5 ∪ 12 1.4	— 0.8 0.8 1.4	14.4 — 4.8	14.9 — —	27.1 — —	— — —	23.9 9.3	18	E	A	B b	外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ	輪積み明瞭 底部 板目 圧痕
19	普	41.4+	—	10.4 ∪ 12 1.3	0.8 0.9 1.0 1.3	13 4.3 5.4	13.3 4.4 5.5	26 4.8 5.3	26.4 4.7 —	34.2 20.8 8.7	9	D	A	B b	基部 右 外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ 基部 板目圧痕	
20	普	42+	—	10.5 0.7 0.8 0.9 1.2	0.7 0.8 0.9 1.2	13.4 4.7 5.3	13.7 5.1 5.2	28 4.5 —	28.7 — 5.3	37.2 23.1 9.6	24	A	A	B b	外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ	輪積み明瞭 底部 板目 圧痕

第2表 小谷1号墳出土円筒埴輪観察表(3)

番 号	形 態	器 高	口 径	底 径	器 厚	透 孔				突 帯 高	刷 毛 目 数	色 調	胎 土	焼 成	成 形 ・ 調 整	備 考
						下 段		上 段								
21	普	42.5	20.7	11 ∪ 11.5	1.1 1.1 1.1 1.2	14.1 4.5 5.4	15 4.8 —	26.4 4.8 5.2	—	33.5 22.3 10	9	A	A	B b	基部 右 外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ 基部 板目圧痕	底部 板目 圧痕
22	普	44.5	20.7	10.1 ∪ 11	1.0 1.0 1.0 1.4	11.8 4.7 5.3	12.3 4.8 5.4	24.7 5.3 5.4	24.9 5.6 5.4	34 20.9 8.3	14	A	A	B b	基部 右 外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ 口縁部 斜刷毛	
23	普	41.4+	—	10 ∪ 12.4	1.0 1.1 1.2 1.2	15.5 4.3 4.9	14.2 4.4 5.3	26.3 4.7 6	28 4.8 5.1	35.7 22.7 9.5	10	D	A	B b	基部 左 外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ 基部 板目圧痕	
24	普	38.6+	—	10.6 ∪ 10.8	0.7 0.8 1.0 1.1	12.5 4.8 6.3	12.2 4.7 5.5	25.8 5.5 6.2	26.5 5 —	34.8 22.1 8.4	13	A	A	B b	基部 左 外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ 口縁 斜刷毛	輪積み明瞭 底部 板目 圧痕
25	普	38+	—	10.7 ∪ 11.9	0.9 0.9 1.4 1.5	12.7 4.4 5.1	12.3 4.3 5.2	25.1 4.3 5.4	25.6 4.2 4.8	34 21.4 7.8	9	A	A	B b	基部 右 外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ 口縁 斜刷毛	基部・底部 板目圧痕
26	普	42.9+	—	11.5 ∪ 12.1	0.9 1.2 1.4 1.4	13.7 4.6 4.8	13.2 4.4 5	26.4 4.4 5.2	26.2 4.7 5.1	34.4 21.4 8.6	9	A	A	B b	基部 左 外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ 口縁 斜刷毛	基部・底部 板目圧痕
27	普	44.4	19.8	10.5 ∪ 11.5	0.9 1.0 0.9 1.1	12.3 4.3 4.8	14.4 4.3 4.9	26.3 — 5.4	27.5 4.3 4.9	36.5 21.6 8.1	9	A	A	B b	基部 右 外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ 口縁 斜刷毛	
28	普	48.3	23.6	10.5 ∪ 11.3	0.9 0.9 1.1 1.4	12 4.9 6.2	12.3 5.0 6.0	27.5 5.1 —	—	36 21.9 8.1	13 ∪ 14	A	A	B b	基部 左 外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ 口縁 斜刷毛	基底部黒斑 底部 板目 圧痕
29	普	47.9	20.7	10.8 ∪ 11.3	0.9 0.9 1.0 1.7	11.2 4.8 5.6	12.1 5.3 5.8	26.2 4.9 5.7	27 5.3 5.6	35.1 20.2 7.1	14	B	A	B c	基部 左 外面 縦刷毛 内面 指ナデ 口縁 斜刷毛	輪積み明瞭 底部 板目 圧痕
30	普	44.2	21.5	10.5 ∪ 11.8	0.7 0.9 1.1 1.2	10.5 3.6 4.8	11 4.1 5	22.3 4 5.3	22.5 4.7 5.2	32.5 18.6 6.7	14 ∪ 15	D	A	B b	基部 右 外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ 口縁 斜刷毛	底部 板目 圧痕

第2表 小谷1号墳出土円筒埴輪観察表(4)

番 号	形 態	器 高	口 径	底 径	器 厚	透 孔				突 帯 高	刷 毛 目 数	色 調	胎 土	焼 成	成 形 ・ 調 整	備 考
						下 段		上 段								
31	普	46.9	24.7	10.5 ∪ 10.9	0.9 0.9 1.0 1.5	11.4 4.8 5.8	11.6 5.5 5.8	25.6 5.6 5.8	26 4.7 5.7	35.3 20.4 7.2	13 ∪ 14	A	A	B a	基部 左 外面 縦刷毛 内面 斜指ナデ	底部 板目 圧痕
32	普	28.9+	—	10.6 ∪ 11	1.0 1.0 1.5	12.5 5.4 6.3	13.5 5.3 6.2	24.3 4.7 —	24.6 — —	22 10	10	D	B	A a	基部 左 外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ	底部 繊維 圧痕
33	普	16.4+	—	10 ∪ 11.4	— — 0.8 1.1	— — — —	— — — —	— — — —	— — — —	9.5	8	D	B	A a	基部 右 外面 縦刷毛 内面 指ナデ 基部 板目圧痕	
34	普	18.6+	—	10.4 ∪ 11	— — 0.8 1.3	14.8 — — —	15.1 — — —	— — — —	— — — —	10.4	14	B	A	C b	基部 左 外面 縦刷毛 内面 指ナデ 基部 板目圧痕	輪積み明瞭 底部 繊維 圧痕
35	普	15.8+	—	10.3 ∪ 10.4	— — 1.0 1.7	9.2 — — —	10.2 — — —	— — — —	— — — —	6.1	14	B	A	C b	基部 左 外面 縦刷毛 内面 指ナデ	輪積み明瞭 底部 板目 圧痕
36	普	48.4	21.3	10.3 ∪ 10.5	1.0 1.0 1.3 1.4	11.5 11.5 5 5.9	11.6 11.6 4.8 5.8	24.3 24.3 — —	24.6 24.6 — —	34.4 20.4 7.2	15	C	B	B b	基部 左 外面 縦刷毛 内面 指ナデ 口縁 横刷毛	輪積み明瞭 底部 板目 圧痕
37	普	40.2	—	11 ∪ 12	0.8 1.0 1.1 1.4	13.9 13.9 4.3 5.4	14.2 14.2 — —	— — — —	— — — —	34.7 22 9.8	9	D	A	B b	基部 右 外面 縦刷毛 内面 斜指ナデ 口縁 斜刷毛	輪積み明瞭
38	普	44.7	19.4	10.4 ∪ 11	0.8 0.7 0.8 1.4	10.8 10.8 3.9 4.4	11.4 11.4 3.8 5.1	23 23 4.2 5	— — — —	33 19.3 8.4	13	B	A	B b	外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ 口縁 斜刷毛	底部 板目 圧痕
39	普	43+	20	— 0.8 0.8 1.2 1.1	0.8 0.8 0.8 1.0 1.4	上から 30.7 5.4 5.3	— — — — —	上から 19.2 5.8 5.7	上から 19.4 — — —	上から 9.9 21.9 34.8	14	A	A	B b	外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ 口縁 刷毛	輪積み明瞭
40	普	34.8+	—	10.8 ∪ 11.2	— 0.8 1.0 1.4	13.6 13.6 4.4 5.4	14 14 — —	29.3 29.3 — —	— — — —	23.3 9.9	24	D	A	B b	基部 左 外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ	底部 板目 圧痕

第2表 小谷1号墳出土円筒埴輪観察表(5)

番 号	形 態	器 高	口 径	底 径	器 厚	透 孔				突 帯 高	刷 毛 目 数	色 調	胎 土	焼 成	成 形 ・ 調 整	備 考
						下 段		上 段								
41	普	14.1+	—	—	— 1.0 — —	— —	— —	— 4.3 4.4	— 4.2 4.9		15	B	A	B b	外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ	輪積み明瞭
42	普	28.2+	—	9.5 ∪ 11.5	0.8 0.8 1.4	10.5 — —	11.6 4.1 4.9	22.6 — —	— 19.6 7.7		14	A	A	B b	基部 右 外面 縦刷毛 内面 斜指ナデ	底部 板目 圧痕
43	普	17.6+	—	10.4 ∪ 11.2	— — 1.1 1.3	11.4 — —	— — —	— — —	— 10.9		14	D	A	B b	基部 右 外面 縦刷毛 内面 斜指ナデ	底部 板目 圧痕
44	普	17.4+	—	10.5 ∪ 11.8	— — 0.9 1.4	13.6 — —	— — —	— — —	— 9.5		14	E	A	B b	基部 左 外面 縦刷毛 内面 指ナデ	刷毛不規則 底部 板目 圧痕
45	普	28.6+	—	11.6 1.1 1.0 2.1	— 11.6 5.3 5.5	12.2 4.7 5.1	24 — —	24 — —	20.3 10.5		11	D	A	B b	基部 左 外面 縦刷毛 内面 指ナデ	
46	普	21.2+	—	11.4 ∪ 11.9	— — 0.9 1.3	18 — —	16.9 — —	— — —	— 10.6		17	D	A	B b	外面 縦刷毛 内面 指ナデ	輪積み明瞭
47	普	31.1+	—	10.7 ∪ 11.3	— 0.7 0.9 1.2	11.3 11.8 4.2 5.4	11.8 23.7 4.0 —	— — —	19.9 8.8		10	A	A	B b	外面 縦刷毛 内面 指ナデ	底部 板目 圧痕
48	普	25.8+	(19)	—	0.8 0.8 1.0 —	— — —	— — —	— — —	上から 9.3 22.6		15	A	A	C c	外面 縦刷毛 内面 斜指ナデ 口縁 斜刷毛	
49	普	20.2+	(22)	—	0.8 0.9 — —	上から 18.3 — —	— — —	— — —	上から 10.8 10		9 ∪ 10	A	B	C c	外面 縦刷毛 内面 斜指ナデ 口縁 斜刷毛	
50	普	28+	22.5	—	0.8 0.9 0.9 —	上から 19.7 5.1 5.6	— — —	— — —	上から 10.7 23.3		9	A	A	C c	外面 縦刷毛 内面 縦指ナデ 口縁 斜刷毛	

第2表 小谷1号墳出土円筒埴輪観察表(6)

番号	形態	器高	口径	底径	器厚	透 孔				突帯高	刷毛目数	色調	胎土	焼成	成形・調整	備考
						下 段		上 段								
51	朝	61.3	30.1	10.5 ∪ 11.8	0.9 0.8 0.9 0.9 1.5	12.5 4.8 5	12.4 4.4 5	25.4 4.5 5.4	26.3 4.6 4.5	43.5 34.8 21.5 7.4	18	A	A	B b	基部 左 外面 縦刷毛 内面 指斜ナデ 口縁 斜刷毛 基部 板目圧痕	底部 板目 圧痕
52	朝	18.7	(25)	—	0.9 — — — —	—	—	—	—	上から 17.3	13	A	B	C b	外面 縦刷毛 内面 斜指ナデ 口縁 斜刷毛	
53	朝	()	(30)	—	0.9 0.8 — — —	—	—	—	—	上から 16 19	18 ∪ 19	E	A	B b	外面 縦刷毛 内面 斜指ナデ 口縁 斜刷毛	
54	朝	30.1+	—	—	— 0.8 0.9 0.8 —	— — 4.3	— — 4.1	— 4.3 4.9	— 4.5 4.2		22	A	A	B b	外面 縦刷毛 内面 斜指ナデ	
55	朝	38.5	—	10.5 ∪ 12.7	— 0.9 1.0 1.1 1.3	13.4		25.4	25.9	35.3 23.4 8.6	18	A	A	B b	外面 縦刷毛 内面 斜指ナデ	

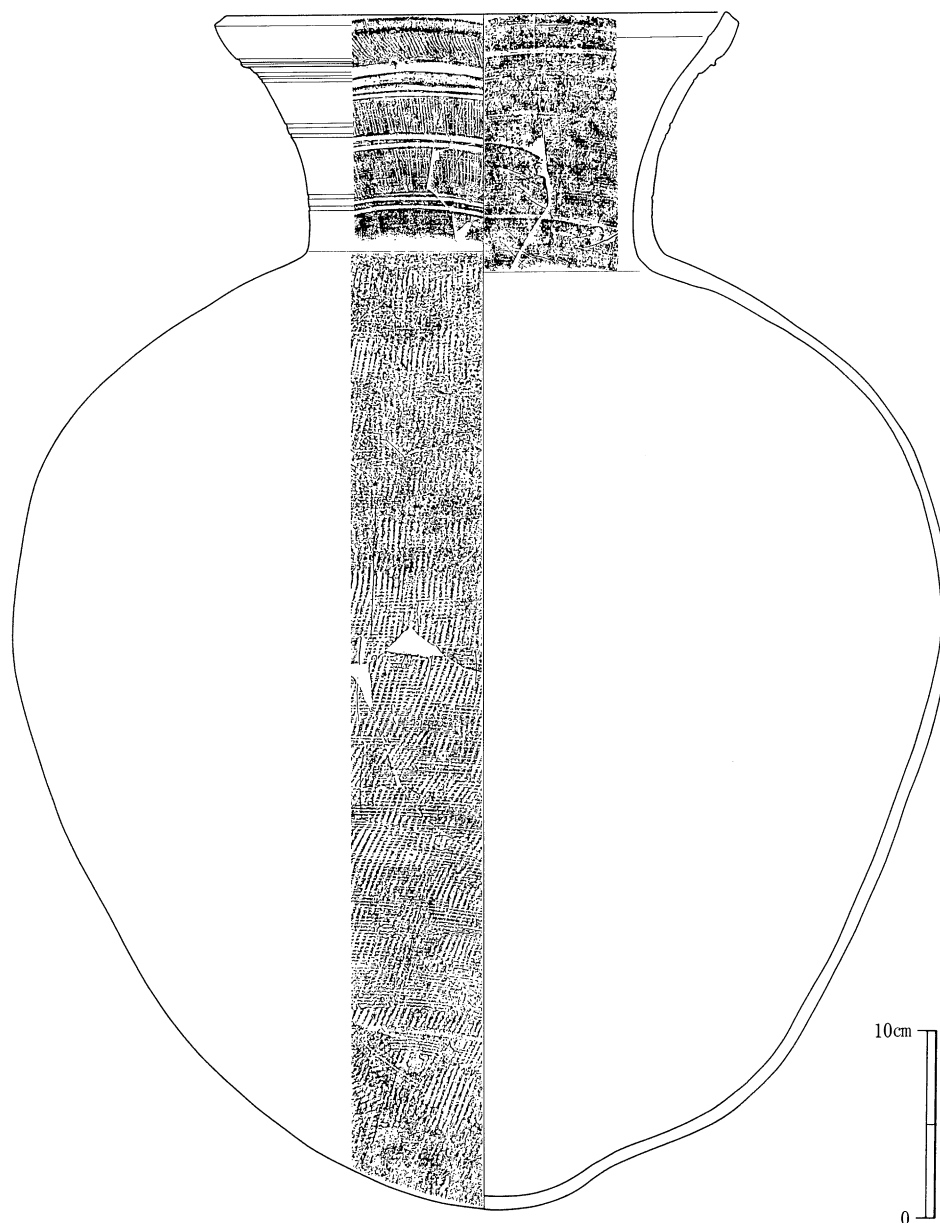
2、須恵器大甕

下に図示したのが、墳頂部で検出された、須恵器の大甕である。ほぼ完形に復元された。口径28cm、頸径19cm、器高63cmを計る。器壁は比較的薄く、胴部中位で6～7mmにとどまる。

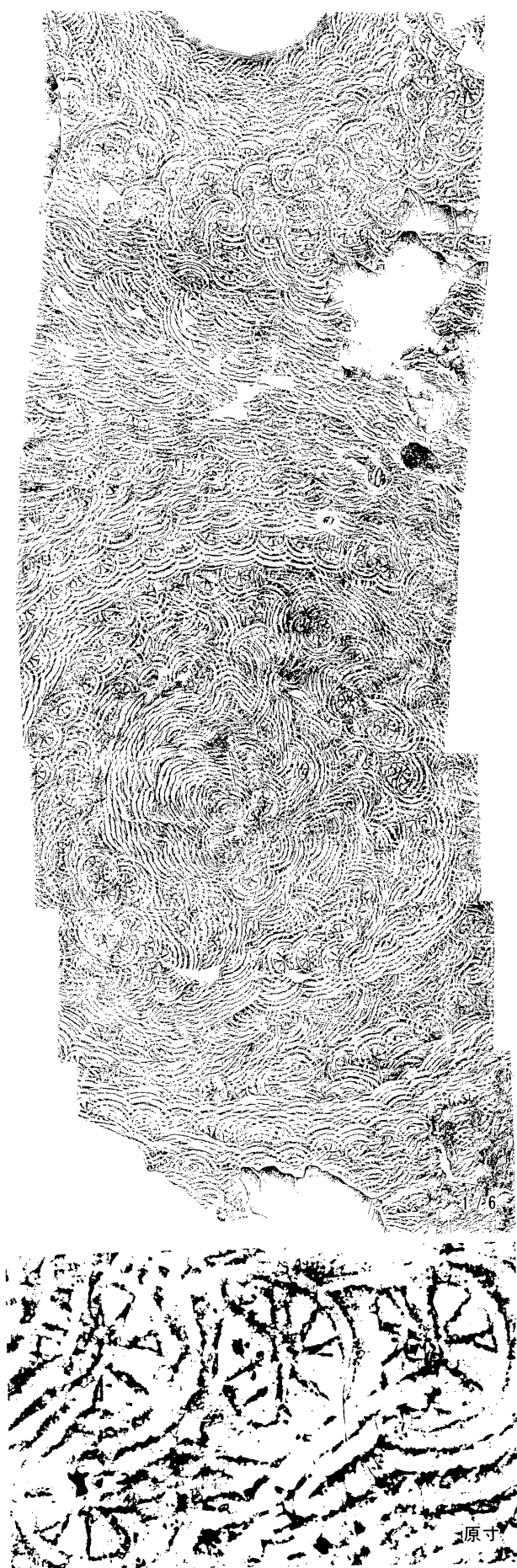
頸部の装飾は、市内通有のものとは若干趣を異にしていることは指摘しうる。すなわち、口縁部上端はやや左傾するハケメが巡り、さらにその下方においては、微小な突帯・沈線で二分された縦方向のハケメが巡っている。

胴部に関しては、タタキ目の上にカキメが施されているのが、断続的ながら観察される。なお、胴部の最下方において、3か所で輪状の粘土の付着が認められた。この輪状の部分を経にして器表の色調が異なることもあわせて考えると、焼成時の何らかの行為の痕跡と考えられる。器形が丸底であるところから、焼き台の痕跡かも知れないが、推測の域を出ない。

以上のような特徴のほかに、前章で触れたとおり、この大甕の特徴の一つに、内面の当て具痕に、



第23図 須恵器大甕実測図(1/4、内面拓影は次頁)



第24図 須恵器大甕内面拓影

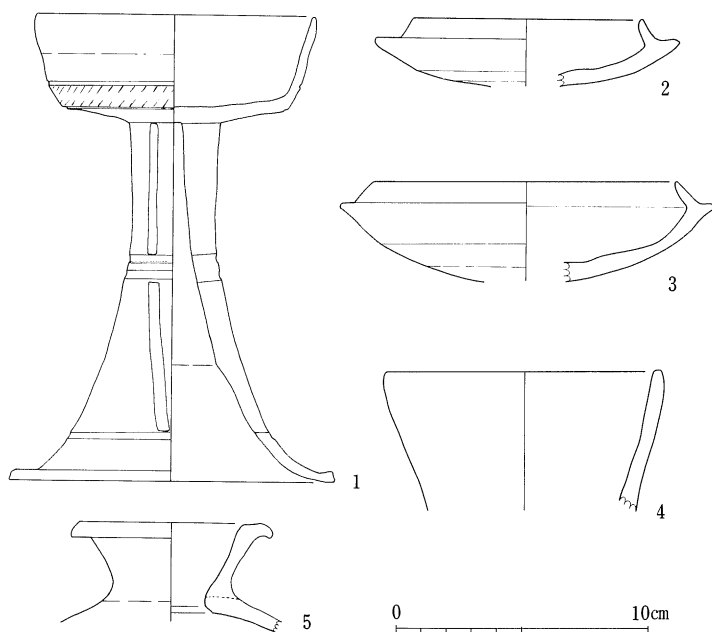
「車輪文」が認められたことが特筆されよう。左図は、内面の拓影であるが、数カ所で、車輪文が連続しているのが、見て取れる。

頸部の特徴的文様、および車輪文は本土器の生産地を考える上で重要な指標となりうるのではないかと考えられるが、現時点においてはその特定はしていない。(なお、国立歴史民俗博物館の酒井清治氏から、愛知周辺の製品ではないかとの指摘を受けた。)頸部の文様のありかたについては、口縁部の形態とあわせて、本来竃に特有のものとも考えられるので、そのことも念頭におきつつ、車輪文の分布とあわせて今後の課題としておきたい。

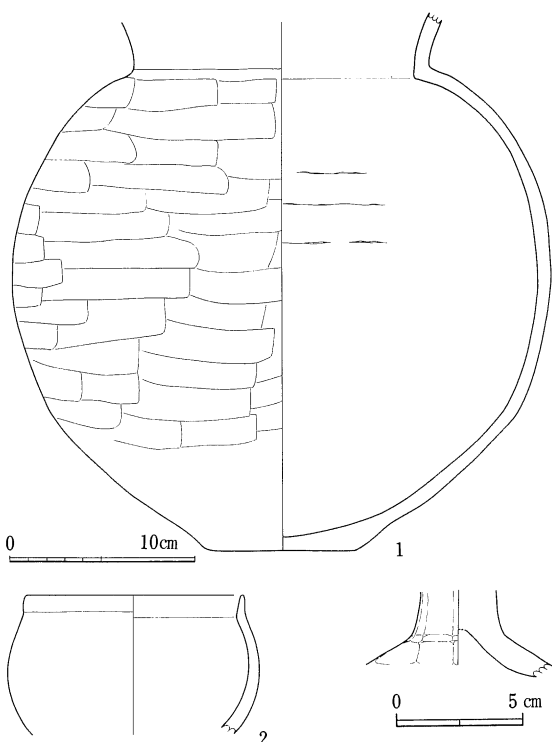
3、その他の須恵器

次頁図の1は、前述の大甕の北方の第8トレンチの南端で検出された、無蓋高坏である。透かし穴は2段で、三方向に穿たれている。坏部の体部は直立気味に立ち上がり、その下半には斜め方向のキザミの施された文様帯を有している。器高18.5cm、口径10.8cm、脚台部径12.8cmを計る。(なお、同じく酒井氏より、産地に関して大阪・陶邑でも愛知でもないとの見解を得ている。)2・3は、坏身である。いずれも、周溝の覆土からの出土である。2は口径9cm、3は同じく12cmである。なお、3については、胎土が5(提瓶)に似ている。4は直口壺の口縁部である。前述の大甕とともに墳頂部から出土している。口径は11cmである。胎土中に小礫を含む。5は、提瓶の口縁部である。開口部に比べて、胴部との接合部の径が極端に狭い感がある。断面の色調をみると中央部分が小豆色を呈しており、この点については大甕との類似性を指摘しうる。

大甕を含めた、これら須恵器の年代上の位置づけに関しては、大阪・陶邑編年のTK209型式に平行する時期のものと捉えておきたい。産地が不明な現状において陶邑編年を援用すること



第25図 須恵器実測図(1/3)



第26図 土師器実測図(1は1/4、2・3は1/3)い。古墳築造時にそれがどこに置かれていたかなどの検討は必ずしも十分に行っていないことを明記しておく。

5、太刀

御神木の移植に立ち会った際に出土したのが、次頁に図示した太刀である。重機により、根の周辺の土を除去していたときに、排土とともに発見されたものであり、どこに存在していたのかは不明である。出土時点は、錆膨れにより、一見すると単なる土塊と見誤るような状態であった。その出土の時点で、工事を一旦中止してもらい、周辺の土層を観察したが、主体部らしき遺構の痕跡は認められなかった。太刀は鍔を中心とする部分のみが検出された。現存部で全長19.2cm、刀身の幅は4.3cmを

については、問題なしとはしないが一応の目安として提示しておきたい。

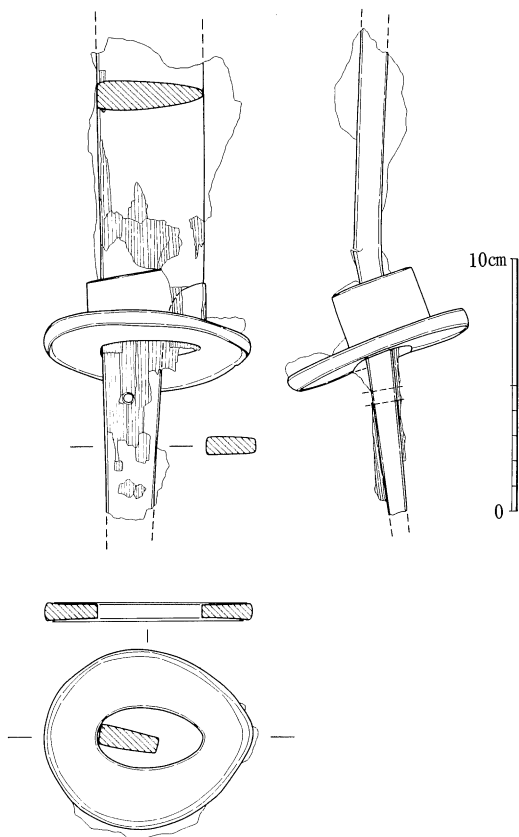
なお、肉眼観察によるだけでも胎土・断面の色調等に差異が認められるところから、その供給が多元的であった可能性も考えられる。自然科学的分析を經ていない現状においては、その可能性を検証することは容易ではなく、したがって、今後の検討課題としておきたい。

4、土師器

今回の調査において出土した土師器は図示した通りであるが、1・2は周溝覆土からの出土、3は調査着手前の表採品

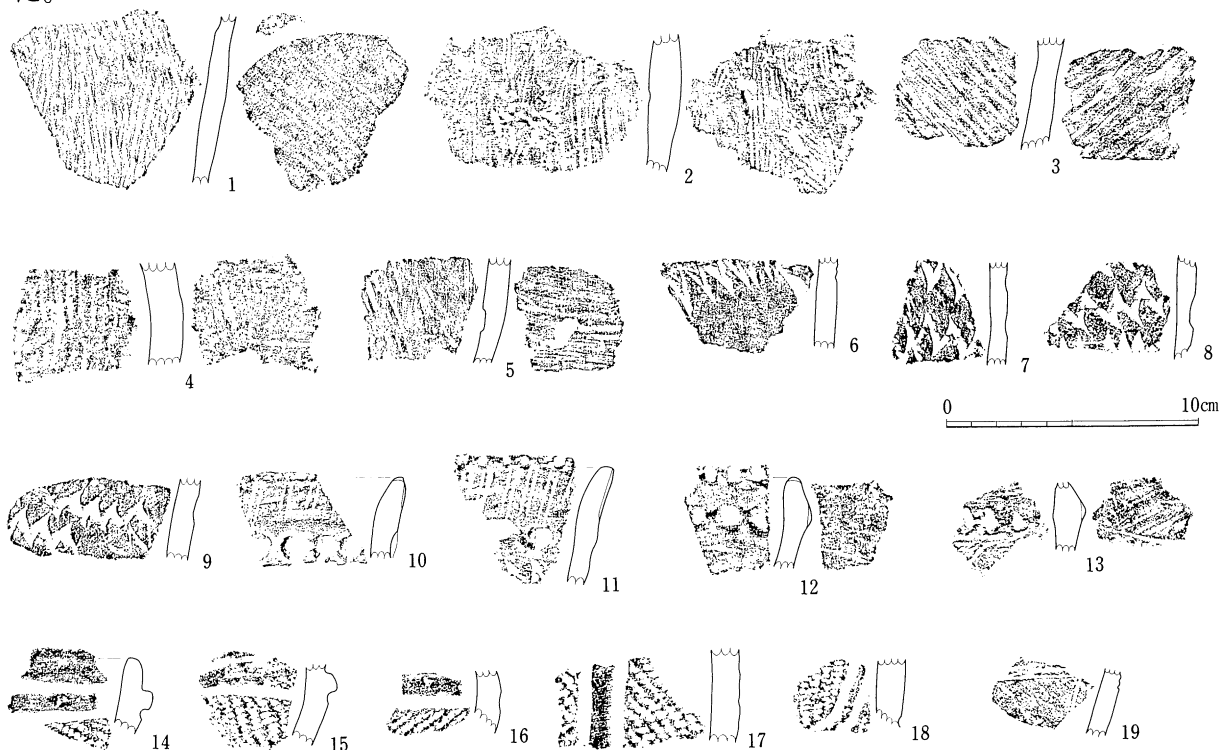
である。そのうち、1については本古墳に伴うものと位置づけておきたい。1の壺は残存部で器高32cm、底径8.2cm、頸部径は16cmである。外面は横方向のケズリがほぼ全面に施され、内面は横方向のナデである。一部に輪積み痕を消し切れていない部分が見られる。なお、外面には径20cm前後の黒斑が2か所認められる。2は比較的小型の碗である。内外面共に赤彩を施している。調整技法については判然としないが、外面下半ではやや右下がりのケズリが認められる。内面底部付近には黒斑がみられる。3は高坏の脚台部である。表採資料でもあり、遺存状況は悪い。外面の整形は不明瞭である。内面では不整方向のケズリが認められる。焼成も甘い。

なお、本古墳に伴うとした1については、破片が埴輪片とともに出土したこと、ほぼ完形に復元されたことをもって、埴輪と同様の扱いとしたにすぎな



第27図 太刀実測図(1/3)

とするものである。おそらく、早期に位置づけられるものであろうが、帰属型式は特定できなかった。



第28図 縄文土器実測図(1/3)

計る。関はわずかに湾曲しており、直線的ではない。目釘穴については1か所残すのみである。なお、関の近くで折れているが、この状態で銹着し安定した状態に至っている。土圧の影響による変形と考えられる。鏝は透かし穴をもたず、卵型を呈しており、長軸方向で8.2cm、短軸方向で7.2cmをはかる。木質の付着も一部で認められる。

6、縄文土器

これまで示してきた以外に、図示したような縄文土器が出土している。1～5は条痕文系。6～9は貝殻腹縁文を施している。10・11は口唇部の押圧とその下の半裁竹管文・円形の押圧が共通する。12は口唇部の押圧とその直下の円形の押圧を特徴とし、13は口唇部を欠くが12に類似するものと考えられる。これら1～13はいずれも縄文時代早期の所産であり、特に6～13は浮島式に位置づけられよう。14～18は隆帯、横位あるいは縦位の沈線の特徴とし、器壁も比較的厚い。縄文時代中期加曾利E式に位置づけられる。最後の19については横位の半裁竹管文を特徴

第5章 ま と め

1、遺 構

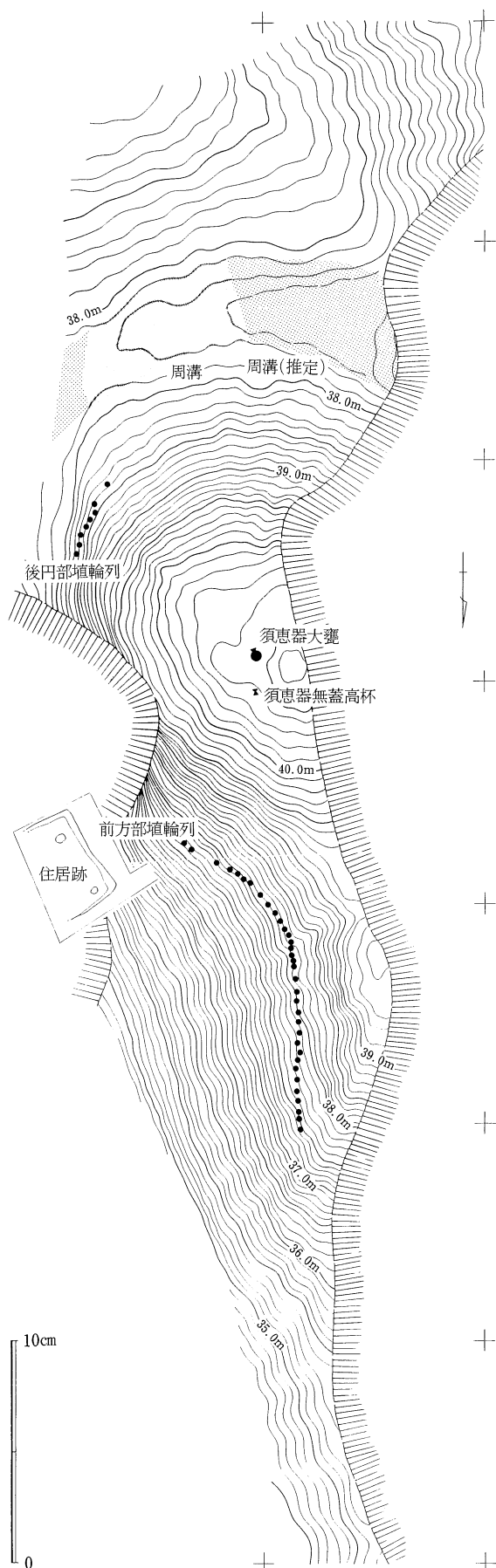
今回の調査の成果を模式的に左に掲げておく。
本古墳の規模については、前方部側で周溝が明らかでない点、前方部の開き方の角度を確定できない点などにより、その復元は困難な状況にある。同様に、主軸の方向も、それを推定するに足る根拠を欠いている。ただし、全長については、大略40m～45m、後円部の直径は、約20mとすることには、大過ないと考えられる。

埴輪列に関しては、図示の通りであり、円筒埴輪以外の出土は認められない。くびれ部にあたる5トレ・6トレ間に関しては、形象埴輪の出土の可能性を考慮して、当該部分を拡張して調査したが、その存在は認められなかった。ただし、本古墳が、西の方向を強く意識して築造されたものと考えらるならば、西側くびれ部付近にその樹立を考えることも可能ではある。しかし、可能性を指摘しうるととどまる。

墳頂部においては、須恵器が検出された。大甕に関してのみ考えると、墳丘内に埋納されていたものと考えるよりも、墳丘上に置かれていたと考えるべきではないかと思われる。確たる証拠を欠くものではあるが、隣接する箇所からの無蓋高杯の出土とあわせて、墳頂上に供献されたものと考えすることもできよう。市内の横穴の調査においても須恵器の大甕が出土すること(たとえば、西国吉や大和田の横穴墓)などと、同様の性格をもつものと考えておきたい。

主体部については、御神木の移植に際して出土した太刀が、その近在の可能性を強く示唆するところである。

本古墳の時期については、出土した須恵器から6世紀末と位置づけられよう。同時に、埴輪を巡らす最終末の古墳として位置づけられるものと理解される。



第29図 小谷1号墳全体図(1/300、等高線は現況)

なお、遺物に関しては次項でふれる。

2、遺 物

(1) 埴 輪

今回の調査により得られた埴輪は、図示し得たものだけで55本を数える。市内出土の埴輪の報告例の中でも、最多の部類に属するものである。しかし、形態上あるいは諸計測値上のばらつきは少なく、比較的単純な一群と言えよう。下総型の範疇で捉えられる、今回出土した円筒埴輪の底径・口径・器高の比率は、おおよそ1:2:4.2である。これまでの一応の目安であった、1:2:4に近い数値でもあるが、若干スマートな形態を持つものと言えるであろう。下総型埴輪の変遷については、十分に咀嚼しきれていないが、共伴した須恵器の年代観と照らし合わせると、その終末期に近い所に位置づけられるのではないかと考えられる。市内では、これまでに18か所から埴輪の出土を見ているが、そのなかでも最も新しい時期の埴輪に位置づけられるものの一つであることは、言うまでもない。ただし、市内出土の下総型埴輪(根田1号墳、君塚天神山古墳)相互の関係については、その時期差は明瞭ではなく、市原市においては「下総型」というだけで、「最も新しい」部類に入ってしまう状況であるが。それと同時に市原市内においては、非「下総型」、つまりは東関東に通有の2条3段の円筒埴輪が出土しており、この両者の関係については、いまだに明確にはされていない。おそらくは、異なる需給ルートが存在したことによる結果ではないかと思われる。(なお、このことは、埴輪の製作が、古墳の近隣でなされたという想定を排除している。工人集団が各地を転々として埴輪の製作にあたった痕跡が見出されていないこと、さらに、それらいわゆる「わたり職人」出現の契機についての合理的な説明が見当たらないことによる。)埴輪に限らず、多様な文物の複雑な流通過程の終着点として、本古墳を見ることも必要であろう。

川西宏幸氏の編年指標に従えば、市内出土の円筒埴輪のほとんどが、そのV期にあたりと考えてよからう。ただし、厳密には指標の一つである、「底部調整」を欠くものがほとんど(山倉1号墳を除く)であるから、V期の典型ではなくその「亜式」というべきかもしれないが。そのV期の細分の可能性について、若干ふれておくと、一つには内面調整に着目する方向が考えられよう。川西氏の指標の中では内面調整は「ナデ・ハケ」が並列されており、編年指標としての有効性が保留されている。市内出土の円筒埴輪について見るならば、内面に全面ヨコハケを施すものと、口縁部近くにのみ施すものの、大きくわけて2種の内面調整が認められる。この点に関しては既に、姉崎古墳群の原1号墳の報告の中でも指摘されていることではあるが、前者が後者に先行するものとして位置づけられている。この傾向が、どの程度の地域にまで敷衍されるかは、筆者の力量のおよぶところではない。いま仮に、市内出土の埴輪に関して、それが妥当性をもつものとしたならば、本古墳出土の円筒埴輪に関しても、V期の中でもその後半に位置するものとして捉えられるであろう。ただし、このことは、市原市内出土の円筒埴輪の変遷のあり方を川西編年を軸にして考えた場合にどう位置づけられるか、という設問にたいする、一つの回答としての意味を持つのみであって、「下総型」全体の位置を与えるものではない。

「下総型」の分布については、本報告においては詳細を明らかにし得なかったが、昨今の状況では市原市に限らず、「上総」に属する山武郡域においても出土が屢々報告されている。その実態については、再度検討する必要もあるのではないかと考えられる。上で触れた「わたり職人」想定の可能性の可否、

流通の問題等含めて、今後の課題としておきたい。

(2) 須 恵 器

今回出土した、須恵器は大甕・坏・無蓋高坏など6点にすぎないが、埴輪との接点を与えられたこと、特殊な技法の痕跡を留めるものがあつたこと、埴頂部での出土が認められたことなど、その量に比して、多くの成果を与えたものと言えよう。大甕については、車輪文の存在、頸部の文様、口縁部の形態など、比較的目につきやすい特徴を備え、自然科学的手法によらずとも、その産地をある程度絞れるのではないと思われる。残念ながら、本報告においてはそれは果たせなかったが、先学諸氏の検討に委ねることとしたい。少なくとも、関東周辺においては、車輪文の存在は確認されておらず東海・近畿にその供給元を想定せざるをえないのが、現状である。したがって、本古墳の被葬者についても、彼の地との何らかの関係を想定しうる。その「関係」については、成案をもたないが、被葬者としての地位と無関係ではなかろう。他の須恵器が、大甕とは別の産地からの供給である可能性も存在する点も考慮すると、多方面との関係を保持しえたことを象徴するものである。このような見地に立ってみると、それらの一部が埴頂部で検出されたことも興味深い。流通機構の掌握の象徴物としての意味を有するとも考えられるからである。あるいは、埴輪祭祀にとって代わって、須恵器祭祀が行われたのかもしれない。いずれも憶測の域を出るものではないが、検討の余地はあるのではないだろうか。

3、総 括

小谷1号墳は、全長40mを越える前方後円墳であり、その墳丘の裾には、下総型円筒埴輪が巡らされていた。埴頂部からは須恵器が出土し、主体部には鍔付の太刀が副葬されていた可能性が強い。

今回の成果は、ほぼ以上のように集約しうる。最後にその被葬者について考えて、本報告を終わることとする。村田川左岸における古墳の展開については、いまだにその実態は十分に明らかにはなっていない。しかし、少なくとも、全長40mという規模そのものは、特に卓越した規模とは言えないであろう。「前方後円」という形態を有することから、その地位の特殊性が考えられるところである。そのような古墳に下総型埴輪がもたらされたことについては、二通りの解釈が可能であろう。一つは、その分布を広げようとする勢いに飲み込まれたとする理解、もうひとつはそれを積極的に取り込んでいった結果とする理解である。先に触れた、須恵器の象徴性との整合性からすると、後者の理解の方を、報告者としては採用したいところであるが、異論のあるところであろうし、早急に結論を導く必要もなく、今後の研究の進展に委ねるべきであろう。いずれにせよ、近隣との関係のありかたの象徴として見ておきたい。

古墳に伴うものを、すべて何らかの象徴物としてみることの是非については、改めて議論することとしても、前方後円墳という在地における政治性の象徴、埴輪の樹立という近隣関係の象徴、須恵器における流通機構掌握の象徴、さらに太刀における武力の象徴、これら様々な象徴性を通すことによって、本古墳の被葬者像というものが、おぼろげながら見えてくるのではないだろうか。少なくとも狭小な地域に「くすぶっている」ような共同体首長の姿は思い描き難い。同時に、これら象徴を誇示するという、地域の支配者としての側面も見逃せないところである。

必ずしも十分な調査が行えない状況にありながら、得られた成果は多大なものであつた。ただし、それを十分に引き出しえなかったのは、すべて報告者の責に帰せられるところである。多方面からの御批判を期待して、本報告を終える。

〔主要参考文献〕

1、周辺の遺跡に関して

- 1 「千葉県市原市埋蔵文化財分布地図―北部編―」 1988
- 2 (財)千葉県文化財センター関係
 - ① 『千原台ニュータウンⅠ(野馬堀遺跡・ばあ山遺跡他)』 1980
 - ② 『千原台ニュータウンⅡ(草刈遺跡A区、鶴牧古墳群、人形塚)』 1983
 - ③ 『千原台ニュータウンⅢ(草刈遺跡B区)』 1986
 - ④ 『千原台ニュータウンⅣ(中永谷遺跡)』 1991
 - ⑤ 『市原市草刈貝塚 千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』 1990
- 3 (財)市原市文化財センター関係
 - ① 『草刈遺跡』 1985
 - ② 『潤井戸西山遺跡』 1986
 - ③ 『下鈴野遺跡』 1987
 - ④ 『中潤ヶ広・天王台遺跡』 1988
 - ⑤ 「草刈尾梨遺跡(潤井戸西山遺跡B地区)」『第6回 市原市文化財センター遺跡発表会要旨』 1991

2、埴輪に関して

(1) 総論

- 4 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』 第64巻2号 1978
- 5 第6回三県シンポジウム資料『埴輪の変遷』 1985

(2) 市内関係

- 6 房総考古資料刊行会『菊間遺跡』 1974
- 7 上総国分寺台遺跡調査団『南向原』 1976
- 8 市原市教育委員会『上総山王山古墳発掘調査報告書』 1980
- 9 上総国分寺台遺跡調査団『上総国分寺台発掘調査概報』 1981
- 10 上総国分寺台遺跡調査団『上総国分寺台発掘調査概報』 1982
- 11 原遺跡調査会『原遺跡』 1984
- 12 (財)市原市文化財センター『千葉県市原市御座目浅間神社古墳』 1987
- 13 市原市教育委員会『昭和62年度市原市埋蔵文化財緊急調査報告書』 1988
- 14 市原市教育委員会『平成元年度市原市内遺跡群発掘調査報告』 1990

(3) 県内関係

- 15 東京大学文学部考古学研究室『我孫子古墳群』 1969
- 16 芝山はにわ博物館『下総片野古墳群』 1976
- 17 吉田章一郎他『千葉県山武町森台古墳群の調査』 1983
- 18 千葉県立房総風土記の丘『千葉県成田市所在 竜角寺第101号古墳発掘調査報告書』 1988

3、車輪文当て具に関して

- 19 横山浩一「須恵器に見える車輪文叩き目の起源」『九州文化史研究所紀要』 第26号 1981

なお、文献2-④(中永谷遺跡)中に、坏内面の「蜘蛛の巣状」の当て具痕が報告されている。車輪文とは異なるが、特異な当て具として注目される。



1. 小谷1号墳遠景(西から)



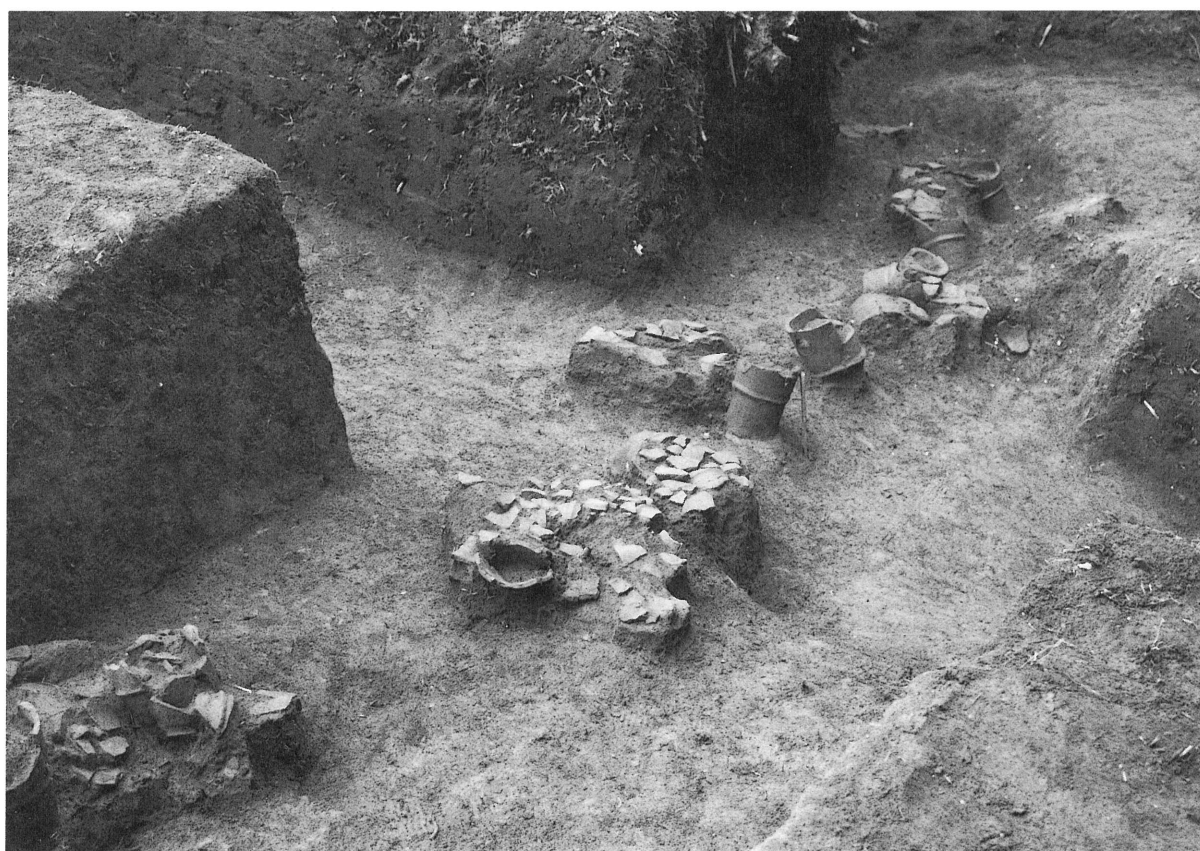
2. 調査前の後円部(南から)



1. 前方部埴輪列全景(北から)



2. くびれ部付近の埴輪列(南東から)



1. 後円部埴輪列検出状況(南から)



2. 周溝内遺物出土状況(南から)



1. 墳頂部須恵器大甕検出状況(北から)



2. 住居跡全景(東から)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12

円筒埴輪 (1) (番号は、挿図・表と一致する)



13



14



15



16



17



18



19



21



20



22



23



24



25



26



27

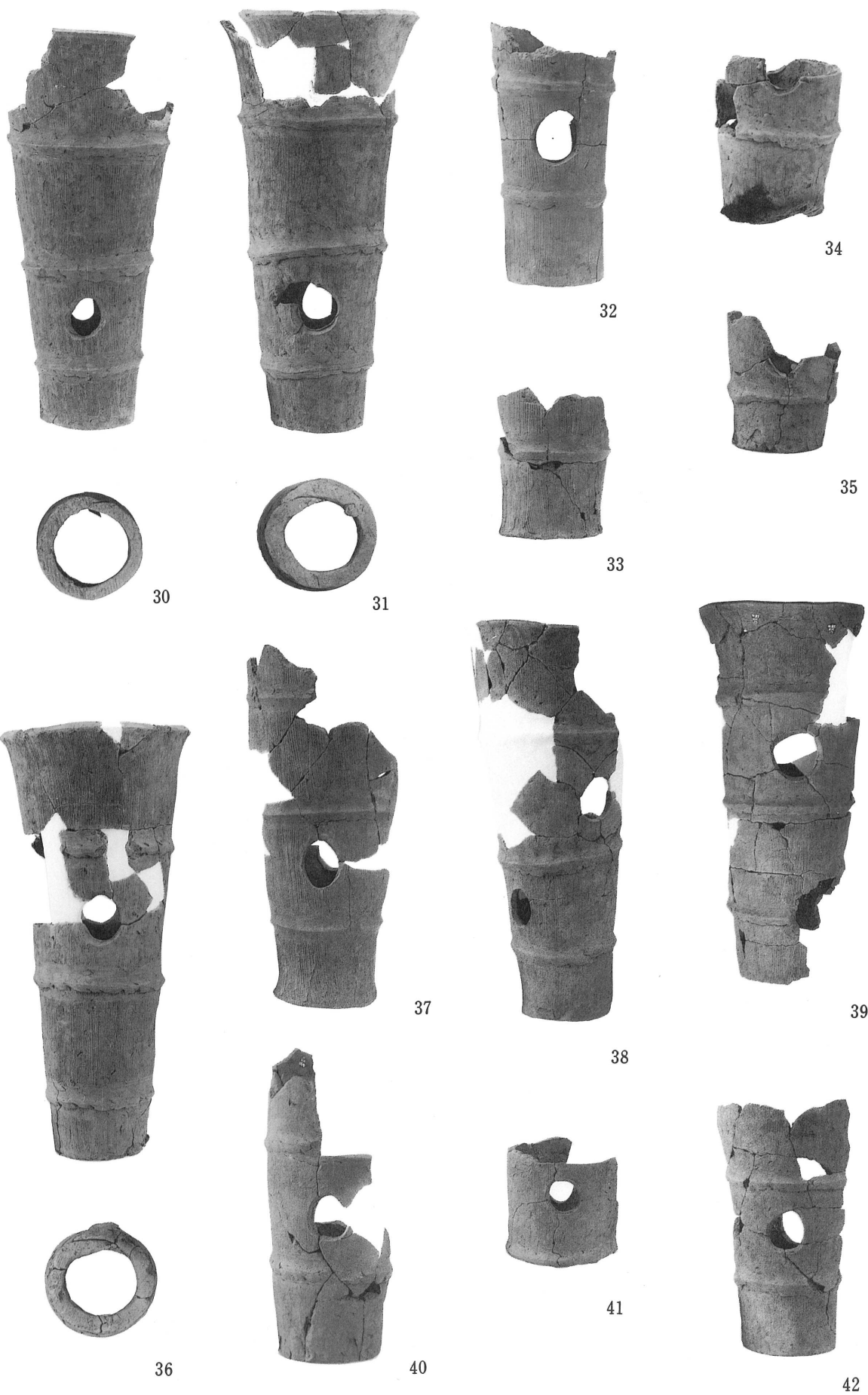


28

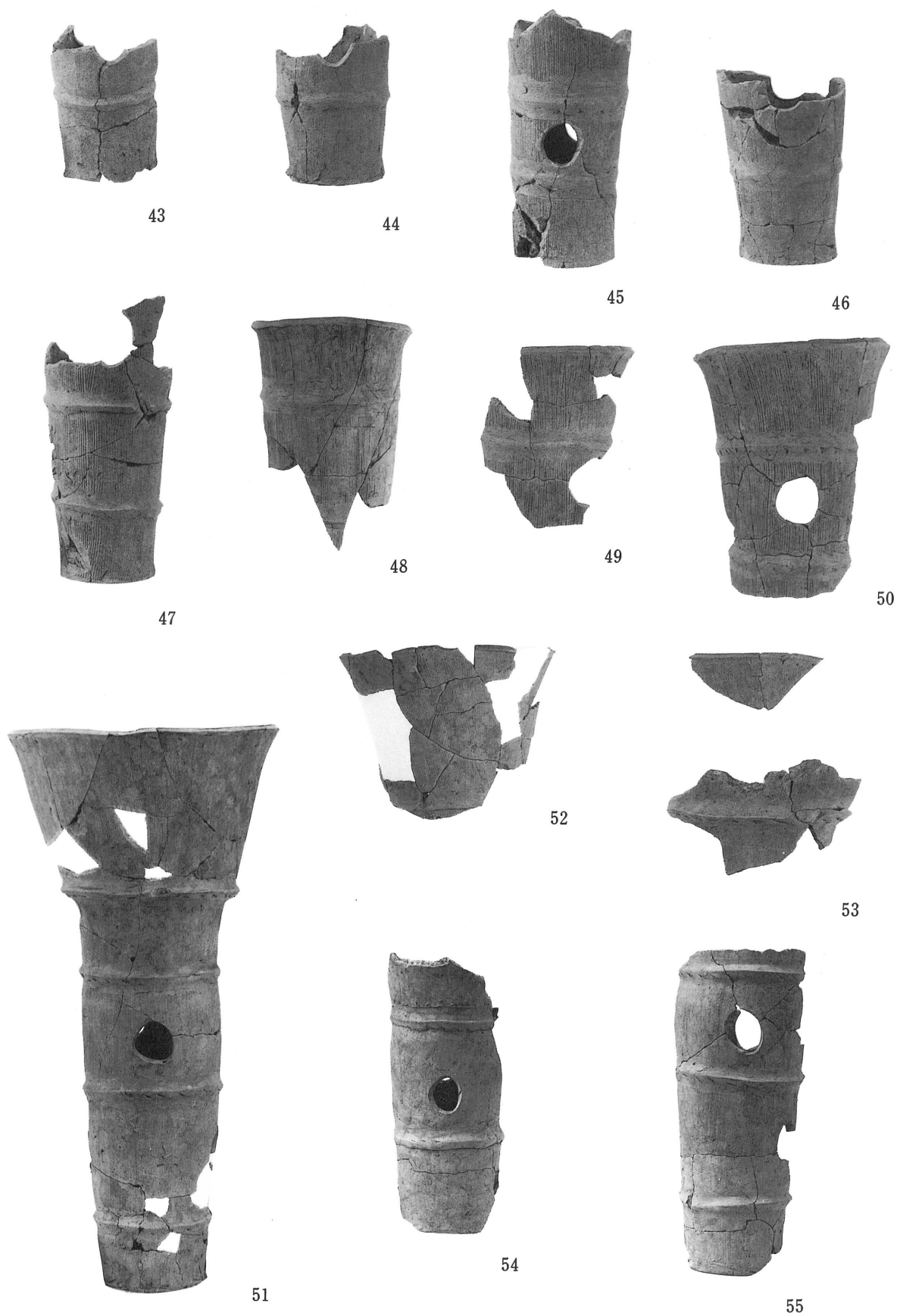


29





円筒埴輪 (4)



円筒埴輪 (5)



大甕

大甕頸部の施文

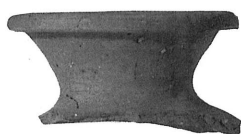


無蓋高杯

大甕底部
輪状の粘土痕



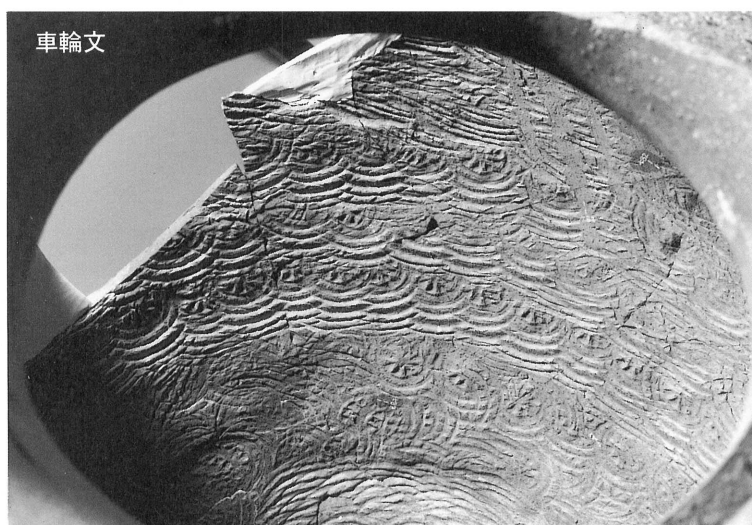
杯



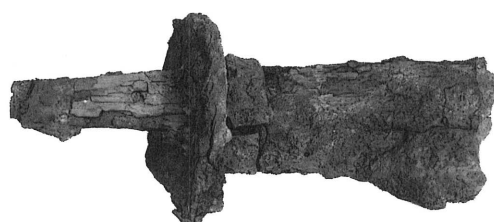
提瓶



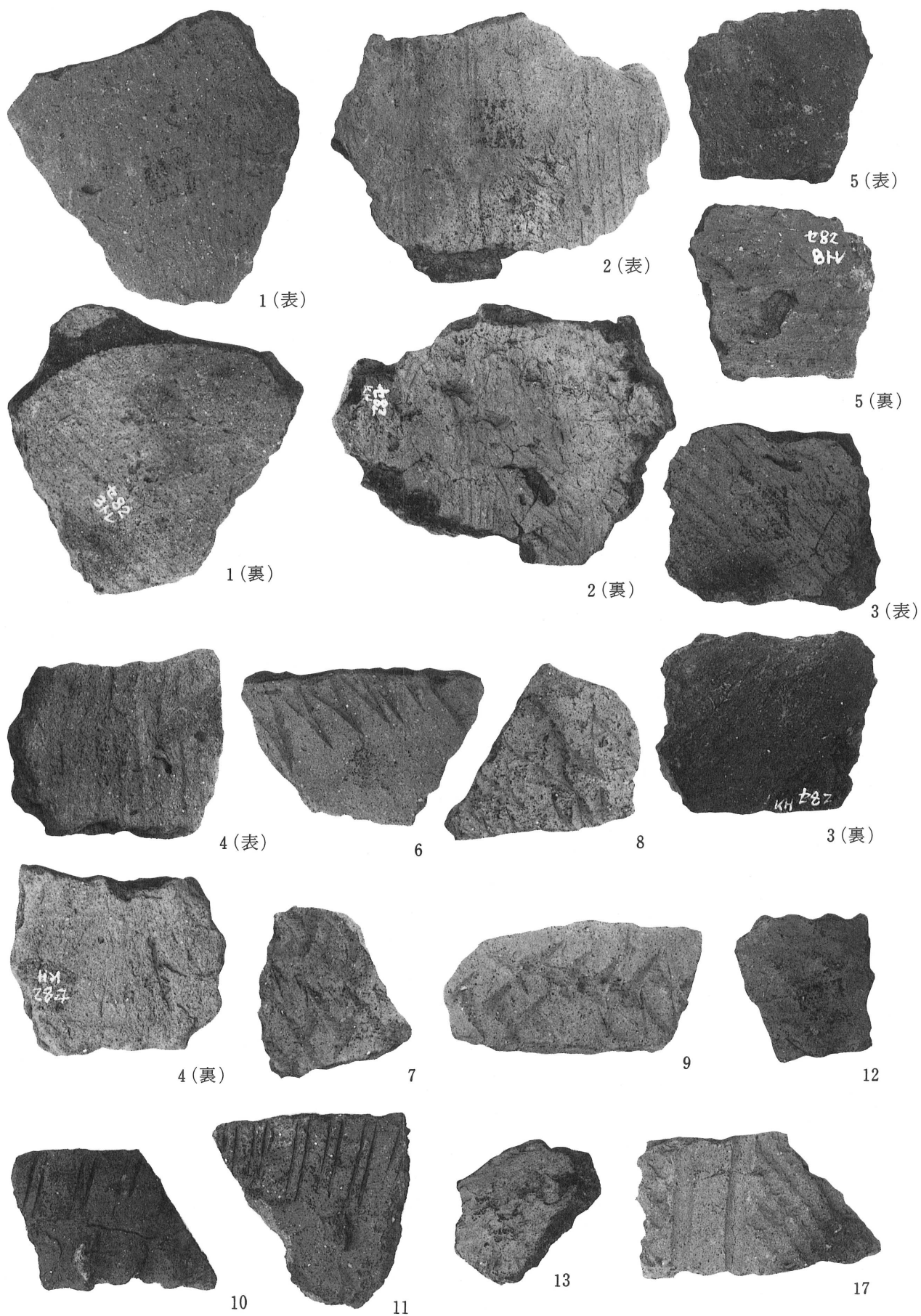
壺



車輪文



太刀



縄文土器(番号は挿図中番号、縮尺不同)

財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第45集

市原市小谷1号墳

平成4年3月20日 印刷

平成4年3月25日 発行

編 集 財団法人 市原市文化財センター

発 行 財団法人 市原市文化財センター

千葉県市原市能満1489番地

TEL 0436 (41) 9000

印 刷 株式会社 三 陽 工 業

千葉県市原市五井5510-1

TEL 0436 (22) 4348